

<研究論文>大坂の陣前後における平戸オランダ商館員エルベルト・ワウテルセンの商務活動

著者	クレインス 桂子
雑誌名	日本研究
巻	63
ページ	7-42
発行年	2021-10-29
その他の言語のタイトル	Elbert Woutersz, a Merchant of the Dutch Factory in Hirado and His Commercial Activities in the Kinai Region During the Siege of Osaka
URL	http://doi.org/10.15055/00007726

大坂の陣前後における平戸オランダ商館員 エルベルト・ワウテルセンの商務活動

クレインス桂子

はじめに

本稿は、平戸オランダ商館の商務員エルベルト・ワウテルセン (Elbert Wouterz, n.d.) が、一六一五年初めから一六一六年末にかけて、京都、大坂、堺などの畿内で行っていた商務活動の一端を関連史料から拾い出し、大坂の陣前後の時期において、オランダ人が日本でどのように商品販売活動を行っていたのか、また、商務活動を通じて地元の宿主^①および日本の商人とどのような関係を取り結んでいたのか、さらに、販売商品の対価として何を得ていたのかを明らかにすることを目的としている。

平戸オランダ商館は、一六〇九年九月に連合オランダ東インド会社^②（以下、「東インド会社」と略記）によつて九州北西部の平戸に開設された。オランダ人は、一六一六年九月に貿易地制限令^③が出されるまでは、日本国内を自由に往来することができ、日本各地での商売の自由が認められていた。この貿易における自由を享受していた期間中に、東インド会社の商務員ワウテルセンが平戸オランダ商館に配属され、一六一五年前後に畿内各地の商都に駐在し、平戸オランダ商館長の指示のもとで、オランダ船が舶載した商品を地元の宿主の協力を得て販売するなどの商務活動を行っていた。

本稿の中心人物であるワウテルセンについては、『大日本史料』に、その書状が関連史料として掲載されているほか、他の関連史料の中

にもその名がみられる。また、先行研究においても断片的に言及されている。

岡田章雄はワウテルセンが鹿皮や明礬みょうばんの価格を伝えていることに触れている。^⑥永積洋子は、外国船の平戸・長崎以外への

来航禁止の通達が出されたことについて商館長へ伝えるワウテルセンの書状を取り上げている。^⑦さらに、加藤榮一は「一六一四年から

一五年にかけて、大坂の陣の前後の慌しい情勢の上方において、マ

ティス・テン・ブルツケやエルベルト・ワウテルセン等の商館員や

ファン・サントフォールトラがオランダ船舶載品の販売や代金の回収、輸向商品確保のため奔走している状況を平戸の商館長に報じ

た書翰が散見する」との所見を俯瞰的に述べている。^⑧また、行武和

博は平戸商館員ワウテルセンの報告書簡を取り上げ、平戸商館の商務員が畿内に駐在し、宿主を通じて委託販売を行っていたことを指摘している。^⑨

フレデリック・クレインスは大坂の陣の際にワウテルセンの見聞きした一般民衆の行動に関する情報について取り上げている。^⑩

これらの情報源はいずれも、ワウテルセンが畿内から商館長に対する業務報告として書き送った書状である。このワウテルセン発信書状は、当時の商品相場価格や貿易商務上の重要な情報を伝達していること、また、駐在先である畿内で執り行った商務活動や実際に見聞きした状況を現地から商館長へ詳細に報告した内容であることから、従来の研究においても、その存在が指摘され、断片的に引用

されることはあつた。しかし、すべてのワウテルセン発信書状を網羅的かつ綿密に調査し、ワウテルセンが畿内で行った商務活動について具体的に踏み込んだ研究はこれまで行われていない。

本稿で取り上げる一六一五・一六一六年を含む十七世紀初期の日本における商業活動に関する現存史料は、もう少し時代の下つた十七世紀中期以降と比較して、非常に乏しい状況である。特に、この時期の中小の商人の活動や商取引の実態を示す具体的な記録は、日本側の史料にはほとんど伝存していない。そのため、当時日本で自由に商業活動を行っていたオランダ商館とイギリス商館⑪の史料は、この日本側史料の欠落を補うための有効な情報源となる。イギリス商館長リチャード・コックス(Richard Cocks, 1566-1624)の記した日記⑫からも、商館員のウィリアム・イートン(William Eaton, n.d.)やリチャード・ウィッカム(Richard Wichham, n.d.)を大坂や江戸に派遣して、日本人の代理人を通じて商務活動を行わせていた様子が窺える。

特に、本稿で取り上げる平戸オランダ商館の商務員であつたワウテルセンが発信した書状は、商館長ジャック・スペックス(Jaques Specx, 1589-1652)に対する畿内各地での様々な商務活動についての業務報告として書かれたものであるため、地元の宿主の家での商品販売活動や宿主との交流、販売商品の種類や数量、価格についての記録、市況や社会情勢に関する情報が豊富にみられる。

本稿では、このワウテルセン発信書状を中心的な史料とし、必要に応じて補助的にその他のオランダ商館文書およびイギリス商館文書も用い、これらの関連史料から、本稿の目的に沿った商務活動の記述を拾い出し、それらを実証的に再構築していく。そして、江戸時代初期の貿易自由期間において、オランダ人が畿内の商都でどのような形で現地の日本人商人と商取引を行っていたのかを具体的に提示した上で、それらの商取引の実態を日本の商習慣として捉え直して分析することにより、当時の日本で行われていた商業活動の一端を明らかにすることを試みる。

第一章では、平戸オランダ商館の概況とワウテルセンの経歴について把握するために、関連情報の整理を行う。まず、第一節で、開設直後の平戸オランダ商館の状況を概観した上で、続く第二節で、開設時からワウテルセンが来日するまでの三年間の日本での平戸オランダ商館の販売活動の状態について触れる。さらに、第三節で、ワウテルセンの勤務状況の概要について把握するために、その来日時から離日時までの足取りを史料から分かる範囲で辿る。さらに、第四節において、本稿における中核的史料であるワウテルセンの書状と、それを包含するスペックス受信書状綴帳の形態と内容について詳述する。

また、第二章では、ワウテルセンの畿内における具体的な商務活動のうち主なものを取り上げる。具体的には、第一節で、ワウテル

センが販売していた主な商品の一つである大羅紗を取り上げ、その販売と需給動向について検討する。また、第二節では、京都の宿主の家でワウテルセンが商務活動を行う上で、宿主とどのような関係が築かれていたのかについて注目し、宿主との関係が示される記述を史料から拾い出し、それらを日本の商習慣として捉え直して分析を加えていく。第三節では、オランダ人が商品取引においてどのような対価を得ていたのかについて、史料から関連記述を示しながら、具体的に検討していく。

第一章 初期の平戸オランダ商館と商務員ワウテルセン

第一節 開設直後の平戸オランダ商館の状況

一六〇九年九月に平戸オランダ商館が開設されたが、最初の数年間の日本貿易は、日本向け商品の不足のために順調には進まなかった。この時期のアジア各地域のオランダ商館は、上級商務員である商館長を筆頭に二、三人の商務員と数名の使用人という小規模なもので、常に人員不足の状態であった。また、東インド会社のアジア域内での交易ネットワークがまだ確立しておらず、各商館では貿易商品の獲得・供給システムの確立に腐心している状況にあった。

一六一〇年の季節風の時期が過ぎても、オランダ船は日本へは一隻も来航しなかった。このことは日本当局の間で平戸オランダ商館

長スペックスに対する少なからぬ非難を引き起こした。同年にポルトガル船も来航しなかったため、オランダ人の来日の目的は貿易のためというよりもポルトガルの船を攻撃するためではないかとの疑いが持たれていた。¹⁵⁾

スペックスは、この困難な状況を打開すべく、日本向け商品を仕入れるために、一六一〇年十月三十一日に、二人の人員を長崎から出航する「船長ヤサエモン」¹⁶⁾の船でシヤムへ派遣した。スペックスがシヤム商館長ランベルト・ヤーコプセン・ヘイン (Lambert Jacobsz Heyn, n.d.) に宛てた書状によると、この時、東インド会社勘定として純銀二万匁および通用銀一万二〇四八匁一分、さらに合計金額八八四四匁二分の様々な漆器の入っている箱十個、そのほかに四三〇七匁七分を持たせて、助手のハンス・フェルストレーペン (Hans Verstrepen, n.d.) とクラース・ピーテルセン (Clas Pietersz, n.d.) を派遣した。¹⁷⁾その後、フェルストレーペンは、コルネーリス・ローレンス・ファン・アルクマール (Cornelis Lourens van Alckmar, n.d.) とヤン・コルネーリス・ファン・エンクハイゼン (Jan Cornelisz van Enckhuyzen, n.d.) とともに日本のジャンク船で一六一一年七月十日に平戸に戻った。¹⁸⁾彼らが日本への帰帆時に乗っていた日本のジャンク船について、逆風のために滞留しているその船を薩摩から平戸に戻すための支援を平戸藩主に依頼したので、謝意を示すための贈物の案を作成することに気が重く感じたとスペックスは一六一一年の参府日記

のなかで記している。¹⁹⁾この時のシヤムへの派遣がどのような成果を上げたのかについては、この記述を除いて、その後の関係書状に言及がないので不明である。

一六一一年七月一日に、ようやくヤヒト船ブラック号がいくらかの大羅紗、²¹⁾鉛、象牙や、オランダ本国からの送付品、そしてパタニ商館からの胡椒および絹製羅紗三箱を舶載して平戸に来航した。²²⁾ブラック号の来航を受けて、スペックスは、同船に乗って来日したピーテル・セーヘルセン (Pieter Segersz, n.d.)²³⁾という商務員を伴い、一六一一年七月十七日に、家康への謁見のために駿河に向けて平戸を出発した。家康へ謁見した後、秀忠への謁見も行い、さらに帰路に再び駿河に立ち寄り、同年九月十九日に平戸に帰航した。この参府時に、将来来航するオランダ船のためのパタニとバンテン商館用の二通の朱印状を得た後に、自由に取引できる許可も特別に請願して認められた。²⁴⁾

参府を無事に終えたスペックスは、平戸に戻った後、東インド会社の経営陣に宛てて出した一六一一年十月二十七日付の書状で、今回ブラック号が舶載してきた小さな積荷では献上品などの経費負担が賄えず、日本貿易を継続させるためには、高い利益が得られる十分な量の積荷が必要であると訴えている。さらに、日本において需要のある商品は中国産品物であるので、その供給を図るために中国貿易の獲得が不可欠であるとの指摘も書き記している。²⁵⁾

このように、開設直後の平戸商館は、一六一〇年にはオランダ船が一隻も来航せず、同年十月に商品獲得のために平戸の人員をシヤムに派遣し、翌一六一一年にようやくオランダ船一隻がわずかな積荷を載せて来航したのみ、という振るわない状態であった。一六一二年には二隻が、一六一四年に一隻が来航し、なお不安定ながらも、日本向け商品の供給が得られるようになり、平戸オランダ商館の日本における商務活動はこの頃から地盤固めの時期に入っていく。

第二節 商館開設後三年間の販売活動

商館開設時の一六〇九年から一六一二年までの三年の間は、日本向け商品の不足に悩みながらも、日本において貿易上の取引の自由を認められたオランダ人は、その自由を活用すべく、この期間にオランダ船で舶載された象牙や胡椒、大羅紗などを販売することに努めていた。商館開設後四年目の時期に当たる一六一二年においては、リーフデ号の生存者の一人、ウィリアム・アダムス (William Adams, 1564-1620)⁽²⁶⁾ が平戸商館のために象牙や胡椒、大羅紗などの商品の販売ならびに商館が必要としていた木材などの物品の供給を請け負っていた⁽²⁷⁾。

スペックスは、アダムス宛の一六一二年六月八日付書状の前半で、大羅紗が定価で売れなければ、少し値下げをしても売却するよう何度も指示していたにもかかわらず、アダムスが一反も売却してい

ないことを残念に思っていると伝えるとともに、一〇三匁値下げしなくても可能な限り多くの大羅紗を売るように依頼している。また、同書状の後半でも再び大羅紗の販売に関して、次のように指示を出している。

【史料一】⁽²⁸⁾

私が貴殿に設定した価格が高すぎて、商人達はこのような高い価格では買えないので、挿入した覚書でお分かりの通り、それを引き下げた。それに従って下さい。それ以下の価格で販売してはいけません。ただし、多少の上下については貴殿の裁量に任せます。というのも、貴殿がそれを最大の利益で売ることができると私は確信しているからである。

この記述からは、大羅紗の販売にあたって、スペックスからアダムスに対して細かく指示が出されていたことが分かる。スペックスは設定した価格で大羅紗を販売するようアダムスに依頼し、売れない場合には、再び商館長側で引き下げた価格を提示し、多少の上下幅はアダムスの裁量に任せてはいるが、最大の利益を出すことを求めている。

また、同書状で、「火事に対して十分安全な蔵にそれらを適切に保管するように留意して下さい。貴殿にくれぐれもその世話を委ね

る」と書かれているので、生地見本帳をもとに商品の受注後に発送するという形ではなく、あらかじめ現物をアダムスに預ける委託販売の形を取っていたことが分かる。

オランダ産品である大羅紗は当初、需要が見込まれたにもかかわらず、日本での販売が進まなかった。その原因として、価格が高すぎる⁽³⁰⁾こと、一反⁽³¹⁾単位のまとまった量での購入が敬遠されたことがあった。スペックスはアダムスから、「値段が高すぎて、一あるいは二、三尋⁽³²⁾ならいいが、誰も一〇二反単位でまとめて購入しようとしなかった⁽³³⁾ので、大羅紗はまだ一反も売却されていない」との報告を受けている⁽³⁴⁾。

アダムスが大羅紗を全く売却できていないことを受けて、スペックスは大坂に派遣していた助手マチアス (Matthias, n.d.)⁽³⁵⁾宛の一六二二年六月八日付の書状に同封された「アダムス氏が大羅紗を販売する時に従うべき価格の覚書」⁽³⁶⁾で、一間⁽³⁷⁾当たりの値下げした価格を提示している⁽³⁸⁾。このマチアスという人物は、スペックスの細かい指示のもとで畿内において、アダムスによる大羅紗販売の連絡補助業務のほか⁽³⁹⁾に象牙などの販売活動を行っていたようである。

このように、ワウテルセンが日本に來航するまでの平戸オランダ商館の日本国内の商品販売は、日本に所領を得て、家康と直接面会できるほどの地位にあったリーフデ号の元乗組員アダムスの協力に頼るところが大きかった⁽⁴⁰⁾。スペックスは、このほか、ヤン・コゼイ

ンス (Jan Coussey, n.d.)⁽⁴¹⁾ という人物を助手マチアスと一緒に京都や大坂へ派遣し、現地での商務に当たらせることもあった⁽⁴²⁾。アダムスと同様にリーフデ号の元乗組員であったコゼインスも、一六〇〇年に來日して以来、そのまま日本に留まっていた。コゼインスは、一六〇九年の平戸オランダ商館開設時に通訳者兼飲食料係として東インド会社に雇用され、平戸商館の商務活動に従事していた⁽⁴³⁾。

なお、スペックスからアダムス、マチアス、コゼインスに宛てた商品販売関係の書状が確認できるのは、この時期のみである。

第三節 商務員ワウテルセンの経歴

本節では、ワウテルセンが日本で勤務していた時期を中心に、彼の経歴に関する情報を史料から整理する。

一六二二年八月二十八日にオランダのスヒツプ船ローデ・レーウ・メット・ペイレ⁽⁴⁴⁾ン号が平戸に到着した。ワウテルセンは下級商務員の資格でこの船に乗って來日した。また、同船には、日本での任期が終了するスペックスと交代で商館長に就任するために、ヘンドリック・ブラウエル (Hendrick Brouwer, 1581-1633)⁽⁴⁵⁾ も乗船していた⁽⁴⁶⁾。

ワウテルセンの東インド会社との契約状況については、一六一五年十月二十八日付の平戸商館・エンクハイゼン号・ヤカトラ号の決議録に言及が見られる。同決議録には、「ヘンドリック・ブラウエル指揮下の艦隊でアジアへ出帆した下級商務員エルベルト・ワウテ

ルセンの四年間の契約期間が八月において満了し」たとの記述がある。⁴²この記述から、ワウテルセンがブラウエルと一緒にオランダから同じ船でアジアに向かったことが確認できる。さらに、同記述からは、ワウテルセンと東インド会社との雇用契約が開始したのは四年前の一六一一年八月からであったことが分かる。この年月はローデ・レーウ・メット・ペイレン号がバンテンに到着した時期である。ワウテルセンと東インド会社との契約期間はアジアに到着した時点で始まり、最初の寄港地バンテンで約九カ月間勤務した後、日本に配属されたと推測される。

また、同決議録によると、ワウテルセンの最初の四年間の給与は月四十五グルテン⁴³であった。契約期間満了に伴ってワウテルセンは給与の低さと日本における昇進の可能性の低さのために解任を要求したが、スペックスからの説得により、適切な昇給および昇進を条件に、さらに三年間会社での仕事を続けることに同意し、以降の給与は毎月二十七グルデン上乗せされ、七十二グルデンに昇給される。これに先立って、バンテンにいる商務総監ヤン・ピーテルスゾーン・クーン (Jan Pieterszoon Coen, 1587-1639) は、スペックス宛の一六一五年六月十日付書状において、ワウテルセンの雇用について、会社の業務遂行に必要な人材であるため、引き続きスペックスの指揮下に置くことを条件として、適切な昇給と上級商務員の地位への昇進の許可を伝えていた。⁴⁴

ブラウエルが平戸オランダ商館長として在任していた期間中のワウテルセンの活動は、当該期間のワウテルセン発信のブラウエル宛の報告類が残っていないため、ほとんど把握できない。ただ、一六一五年以前にもワウテルセンが畿内に派遣されたことがあるのは確実である。ブラウエルからメルヒヨル・ファン・サントフォールト (Melchior van Santvoort, 1570?-1641) 宛の一六一四年九月四日付書状には、ファン・サントフォールトが皮の売却に成功したという報告をワウテルセンから受けた旨が記されている。⁴⁵このことから、間接的な形ではあるが、ブラウエル在任期間中にワウテルセンが派遣先の畿内から商務報告を書き送っていたことが確認できる。ワウテルセンは来日後の比較的早い段階で畿内に派遣され、以前にアダムスをはじめとするリーフデ号の元乗組員が畿内で担っていた商品仲介業務を引き継ぐようになったようである。

ブラウエル在任期間中の主な販売商品は、一六一二年八月に自らも乗船して来航したローデ・レーウ・メット・ペイレン号が舶載していた大羅紗などのオランダ産商品、同年九月にパタニから来航したハーゼウイント号が積んできた中国産品物や胡椒、ならびに一六一三年にブラウエルがヤン・ヨーステン・ファン・ローデンスティン (Jan Joosten van Lodensteijn, 1536?-1623) の船をシヤムへ派遣した際⁴⁶の帰り荷である蘇木、鹿皮、鮫皮、陶器、樟脳および生糸であった。⁴⁷ブラウエルの二年間の日本勤務の任期が満了する一六一四年八月

に商館長交代のためにスペックスが再び来日したことに伴って、スペックスの指揮下でのワウテルセンの勤務が始まる。

ワウテルセンからスペックス宛の最初の発信書状は、大坂から出された一六一四年九月七日付のものである。⁽⁵⁰⁾ この書状はスペックス発信の八月十三日付の書状に対する返事として書かれたもので、ワウテルセンは返事の中で、同月三十一日に受け取ったスペックス発信書状からスペックスが八月に平戸に到着したことを知ったと記している。この書状の内容から、この時期にワウテルセンが畿内にいたことが分かる。スペックスはブラウエルと交代で平戸商館長に再就任するために一六一四年八月六日にスヒップ船アウト・ゼーランディア号で平戸に到着していた。⁽⁵¹⁾ また、この書状でワウテルセンはスペックスからの依頼に応じて、畿内における商品の相場表を送付すること、大坂と江戸での大羅紗の販売状況なども伝えている。

なお、この書状とともに送付された相場表には、東インド会社に関連する輸出入商品の大阪、堺、京都における市場価格が書き上げられているが、日本向け輸入商品の価格表の最後に、大黄と安息香については和名を知らないで、その価格を問い合わせることができなかつたことが記されている。⁽⁵²⁾ この記述から、ワウテルセンは、相場表に掲載されている生糸や繻子などの主な取引商品の和名の知識を有し、通訳を介さずに自ら価格の問い合わせを行っていたと推測される。スペックスは、ワウテルセンについて、日本の言語、習

慣、状況に熟練していて、学ぶ段階を越えていると記している。⁽⁵⁴⁾ スペックスの評価通り、畿内に長く駐在していたワウテルセンは、日本語と日本の商習慣に精通し、通訳なしで日本の商人とコミュニケーションを取ることができるようになっていたと思われる。

前述の一六一四年九月七日付のスペックスに宛てた書状を大坂から送付した後、ワウテルセンは、参府使節として、下級商務員マティス・テン・ブルッケ (Mathijs ten Broecke n.d.)⁽⁵⁵⁾ と合流して、駿府へ派遣されている。⁽⁵⁶⁾ 参府を終え、一旦、平戸に戻ったワウテルセンは、翌年の一六一五年一月に再び畿内に派遣され、同月二十五日に堺に到着している。⁽⁵⁷⁾ この時から一六一六年十二月までの間、ワウテルセンは畿内で対応しなければならない様々な商務についての報告や照会のため、スペックス宛に頻繁に書状を発信している。

ワウテルセンを派遣するにあたって、スペックスはファン・サントフォールト宛の一六一五年一月九日付の書状において、ワウテルセンについて次のように書き送っている。

【史料二】⁽⁵⁸⁾

私は貴殿に本状の持参人エルベルト・ワウテルセンとあらゆることにおいて良好な文通および友情を継続してくれるようお願いする。以前のように会社の業務を彼の地で監督し、実行するために彼を再び上に派遣する。⁽⁵⁹⁾ 会社の商品の最大の保証のため

に得策であると考えられる形で彼を助言や行為で支援して下さい。⁶³

この書状からも、平戸オランダ商館に赴任した後、すでにワウテルセンは商館長ブラウエルの指揮下で畿内に派遣されていたが、今回スペックスがブラウエルと交代で再び商館長に就任してから、改めて畿内に派遣されたことが確認できる。また、現地での業務の監督と遂行において、日本やアジアでの豊富な取引経験を持ち、当時堺に居住していたファン・サントフォールトから様々な助言を得ていたこともこの書状から窺える。

一六一五年一月を起点とするワウテルセンの畿内での駐在期間が一年半以上経過した一六一六年九月に、幕府から貿易地制限令が出された。ワウテルセンは、この制限令の発布の知らせを受け、平戸に引き上げるために商品代金や貸借金の清算などの残務処理に入ることになる。⁶⁴ ワウテルセン発信書状のうち、一六一六年十二月二十九日付大坂発信の書状が最後のものである。その後のワウテルセンに関する情報は、平戸オランダ商館の史料にはごくわずかしがなく、むしろ平戸イギリス商館の史料にみられる。⁶⁵

以下、イギリス側史料から、ワウテルセンに関する主な動向について拾い上げる。平戸イギリス商館長リチャード・コックスの日記の一六一七年二月十一日条には、畿内滞在が許されなくなったワウ

テルセンが日本人の妻と子供とともに京都から平戸に来たことが記されている。⁶⁶ 直後の同年三月十三日条には、ワウテルセンの京都の宿主が將軍の禁令に反して長期にわたってワウテルセンを滞在させたことで投獄されたことが記されている。⁶⁷

また、同日記の一六一七年八月三十日条には、ワウテルセン、テン・ブルッケおよび船長バルクハウトが將軍謁見のために平戸から畿内に向けて船で出発したことが記されている。⁶⁸ オランダ人一行に続いて、九月五日に京都に向けて平戸を出立したコックスは、九月十五日条で、大坂に到着したところ、オランダ人一行がヨーステンの助言で平戸藩主を通さずに直接伏見にいる將軍のところへ謁見のために行ったが、差し止められたという話を聞いたと記している。⁶⁹ その後の九月二十三日条では、コックスは、その夜に平戸に戻るために伏見から大坂に向かうワウテルセンにイギリス商館員宛の書状を託したことを伝えている。⁷⁰

この参府旅行以後、ワウテルセンの平戸オランダ商館での勤務が一六二一年まで続く。⁷¹ この期間中は、主に平戸においてスペックスの下で商館付勤務を行い、また、イギリス商館の人々とも交流があったことがコックスの日記から窺える。

コックスの日記一六二一年二月二十日条によると、この日、ワウテルセンは船長として平戸の河内浦からジャンク船に乗ってバンテンに向けて出発するところであった。⁷² また、同日記の同年八月六日

条によると、この日、ワウテルセンはジャカトラから来たオランダ船マイデン号¹²⁾で平戸に戻っている。そして、この年の秋にワウテルセンは日本を離れた。コックスの日記には、一六二一年十月十六日条にワウテルセンがスペックスとともにジャカトラへ向けてズワーン号¹³⁾で出発したと記されている¹⁴⁾。

なお、商務総監クーンからワウテルセン宛の一六二〇年六月十三日付書状によると、ワウテルセンおよび妻と三人の子供に対する乗船許可が認められている¹⁵⁾。家族を連れて日本を離れるために商務総監へ乗船許可を申請したものと推測される。

第四節 スペックス受信書状綴帳に含まれるワウテルセン発信書状
ワウテルセンの畿内における商務活動を分析するための中核的史料であるワウテルセン発信書状は、派遣先の畿内から随時、商館長スペックス宛に書状形式で書き送られていたものであり、その内容は、畿内における商品販売状況や荷物の受取と発送、商品需給状況、相場などの商務に関するものが大半を占め、出張先での商務活動に関する業務報告書と位置付けられるものである。

このワウテルセン発信書状は、商館長スペックスが受信した書状の写しの綴帳一冊分（以下、「スペックス受信書状綴帳」）に含まれ、オランダ・ハーグ国立文書館に伝存している。

「スペックス受信書状綴帳」は、「Het archief van de Nederlandse

Factorij in Japan（日本オランダ商館文書群）」の中に含まれる史料であり、ハーグ国立文書館の分類記号として「J.04.21, no. 276」が付与されている。表紙部分には「Onfangene brieven zedert den 4en Augs 1614 tot den 29 Decemb 1616（一六一四年八月四日から一六一六年十二月二十九日までの受信書状）」と手書きで記されている。（図1）

表紙の次の頁以降には、書状一三〇通分が受信順に当時のオランダ語の筆記体で整然と筆写されている。同綴帳は複数の書状原本が合綴されたものではなく、受信された書状が控えとして同時代に受信順に書き写されていき、最終的に綴じられたものである。したがって、「受信書状控綴帳」と呼ぶ方がより正確かもしれない。

同綴帳に収録されている最初の書状は、当時の平戸商館長ブラウエルによって、任期満了に伴う交代要員として新商館長を乗せて近々平戸に來航する予定のオランダ船を迎え入れるために書かれたもので、一六一四年六月二十一日付で発信されている。この年に來航した船に乗って後任の商館長として赴任してきたのが、ブラウエルの前任者として平戸商館長を務めていたスペックスであった。この書状は平戸島の南に到着したスヒップ船アウト・ゼーランドディア号の中で八月四日に受信されている。

また、同綴帳の最後の部分に収録されているのは、一六一六年十二月二十九日付のワウテルセン発信の書状である。つまり、同綴帳における書状の収録期間は、スペックスが再来日した時から開始し、

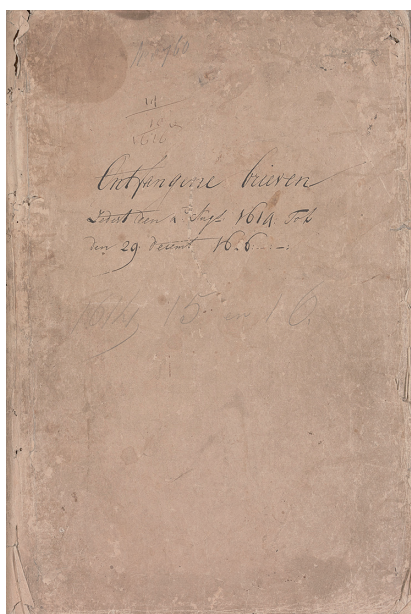


図1 スペックス受信書状綴帳表紙
表紙には、「Ontfangene brieven zedert den 4en Augs 1614 tot den 29 Decemb 1616 (1614年8月4日から1616年12月29日までの受信書状)」と記されている。
(ハーグ国立文書館所蔵 1.04.21, no. 276)

一六一六年九月に貿易地制限令が公布されたことを受けて、京都、大坂、堺に必要に応じて派遣されていた商館員ワウテルセンが平戸に引き上げる一六一六年末頃までで終わっていることが分かる。同綴帳では、日本国内各地から商館員および商館関係者が商務報告としてその都度スペックスに書き送った書状が大きな割合を占めているが、国内各地での自由な商業活動が禁止された一六一七年以降に、そのような逐次の通信が途絶えたことを区切りとして一冊に綴じられたのであろうか。スペックス自身はこの後も一六二一年まで引き続き平戸商館長として日本に留まっていたので、この期間分の書状が一冊として綴じられていることは、平戸商館時代全期間のうちの一つの画期を示す象徴的な史料といえるかもしれない。

なお、受信書状綴帳とはいえ、同綴帳には、畿内へ出張中のス

ペックスから平戸に残っている商館員に宛てた発信書状の控えが二通含まれる。このうち一六一五年九月十五日付の書状は京都に向かう途中の相ノ島沖の小型船から、また、一六一五年九月二十五日付書状は京都から発信されたものである。

平戸オランダ商館で保管された同綴帳は、一六四一年のオランダ商館の出島への移転に伴って、その他の文書とともに、出島オランダ商館に移された後、幕末まで長期間にわたって同商館で保管されていたが、一八五二年のバタフィアへの移管を経て、一八六三年にオランダへ渡り、現在はハーグ国立文書館に所蔵されている。¹⁷⁾

同綴帳における書状の発信者には、平戸から畿内に派遣されたワウテルセンをはじめとする各商務員のほか、シヤムやパタニなどのアジア各地の商館に駐在している東インド会社の商館長、商務総監クーン、アムステルダム本部の重役、ヨーステンや、ファン・サントフォールト、アダムスなどの日本に在住していたリーフデ号の元乗組員が含まれる。

ワウテルセン発信書状は、同綴帳に収録されている全一三〇通のうち四十九通を数え、四割近い割合を占める。¹⁸⁾ このうち、一六一四年九月七日付大坂発信の二通を除き、残りの四十七通はすべて一六一五年から一六一六年までの畿内滞在期間中に発信されたものである。この期間中の最初の書状は、堺到着直後にその地から発信された一六一五年一月二十九日付のものであり、最後の書状は大坂発信

一六一六年十二月二十九日付のものである。また、発信頻度については、この期間中、ほぼ毎月の頻度で発信されており、多い時にはひと月に四通ないし五通が発信されている月もみられる。一六一五年五月二十八日付および一六一五年六月十一日付の二通は、同僚のマティス・テン・ブルッケとの連署書状である。発信場所の内訳は、京都発信二十五通、大坂発信十九通、堺発信五通である。(表1)

ワウテルセンは、スペックスに宛てて書状を送る際に、通常は自分の書いた書状の控えを手元に残していたようである。そのことはワウテルセン発信の一六一六年九月八日付の書状の末尾に追記されている、「本状については控えを取っていない。なぜなら、貴殿の書状に対する詳細な回答を貴殿に直ちに送る予定であるからである」という記述から読み取れる。⁽⁷⁹⁾ この記述には、今回、発信書状の控えを取らなかったのは、次の書状で詳細な返事を書き送る予定があるための例外であるということが含意されている。実際に、三日後の九月十一日付発信書状には、予告通りに、詳細な報告が長文で記されているのが確認できる。⁽⁸⁰⁾

なお、ワウテルセン発信書状を含むスペックス受信書状綴帳の大部分は、いつ、どこで、誰が、誰宛に、どのような目的で書き記されたのが特定可能であり、外面的にも、内面的にも史料批判に十分堪える信頼性の高い史料であるといえる。⁽⁸¹⁾ ほとんどすべての書状には、発信日付、発信場所、発信者が記されている。発信場所につ

いては、「京都にて」のような簡潔なものほか、船上で執筆・発信された場合には「呼子の前の停泊地で錨を降ろして停泊しているバルク船上で執筆」のように詳細な場所が記述されている例も見受けられる。なお、受信者については、宛名書きとして必ずしもスペックスの名が明記されていないが、商館の受信書状綴帳という史料の性格から、基本的に商館長スペックスが受信者であるとの推定が可能である。

江戸時代初期の日本側の商業史料の残存点数が少ないなか、この時期に日本に滞在していた東インド会社の商館関係者が書き残した商業関連記録は、日本側史料の欠落を補完する可能性があるという点でも高い史料価値があると考えられる。

「はじめに」で先行研究として言及した行武論文は、ワウテルセン発信書状の一部を用いて、輸入品販売と日本仕入品の購入の実態について主に品目・数量・価格に注目した分析を行っているが、⁽⁸²⁾ 本稿では、これらの書状をさらに網羅的に検討し、より具体的な取引実態の解明を試みる。

第二章 商務員ワウテルセンの畿内における商務活動

第一節 宿主制度を利用した大羅紗の販売

大羅紗は初期の平戸オランダ商館の主な販売商品の一つであった。

本節では、大羅紗の需要と販売の状況や販売相手などについての記述を史料から拾い上げ、大羅紗をめぐる商務活動の実態をみていく。

大羅紗は高価な厚地の紡毛織物で、ヨーロッパでは衣服、家具や壁の覆いなどの用途で用いられたが、日本では陣羽織・火事羽織、合羽など防雨・防寒用としての需要があった。⁽⁸³⁾ ワウテルセンの一九一五年二月九日付の覚書によると、当時、畿内では大羅紗一間当たり一三〇匁から二三〇匁の額の額で販売されていた。⁽⁸⁵⁾ 販売単位は様々で、裁断前の十五間ほどの長さの大羅紗を半分に切って販売することもあれば、一間単位での切り売りもされていた。⁽⁸⁷⁾

平戸オランダ商館開設後もない時期に、スペックスはオランダ本部宛の書状で、オランダ産品物のうち日本で需要のある商品のひとつとして大羅紗を挙げ、「様々な色の大羅紗のまとまった量」を送るように本国に要求していた。⁽⁸⁸⁾ 初期にはアダムスに大羅紗の販売を委託していたが、販売単位の大きさと価格の高さの問題から販売が進まなかった。

前述の通り、商館長ブラウエル在任期間中の一九一二年から一九一四年までの間にもワウテルセンは畿内に派遣され、現地における商品販売活動に従事していたはずであるが、ブラウエル宛の書状が伝存していないため、その期間のワウテルセンの商務活動についての情報はほとんどない。

ワウテルセン発信書状における大羅紗販売についての記述は、一

六一四年九月七日付の書状にみられるものが初出である。同書状でワウテルセンは、この時期、大坂および江戸での大羅紗の販売は「非常に悪い状態であり、辛抱するしかない」とスペックスに報告している。⁽⁸⁹⁾

ワウテルセンは、一九一五年一月二十九日付のスペックス宛書状で、畿内での商務状況として、宿主のところに預け置いていた大羅紗が大坂冬の陣で焼失した可能性があることを伝えるとともに、京都で大羅紗十六反が商人向けに売却されたことを報告している。また、売却代金については、「京都に取りに行かなければならない」が、「大御所がまだその周辺に四万人を駐屯させている」ため、現在平戸に送付することは無理であると報告している。⁽⁹⁰⁾ この報告からは、当時、畿内では、大坂の陣の影響で、商業における代金回収が困難な状況になっている様子が窺える。さらに、同書状で、ワウテルセンは、大坂冬の陣が終わった後の商品販売の見通しについて、次の通りに書き送っている。

【史料三】⁽⁹¹⁾

当地での販売については現時点で貴殿に確かなことを書くことができない。なぜなら、この戦争が終わった今、しばらくの間は特別なことは何も起こらず、現在日本のお正月であるからである。そして、今後再び改善することに疑いの余地がないこと

は確かである。それゆえ、私が間違っていないければ、そして貴殿がよろしければ、陶器一揃い、丁子、胡椒、大羅紗の積荷一揃いが上に送付されることが得策であると思う。

このように、ワウテルセンは、戦争が終わったとの認識のもとに、日本の正月期間中は商売活動が休止しているが、今後は販売状況が改善に向かうはずなので、販売商品として陶器や丁子、胡椒そして大羅紗を畿内へ送付することを提案している。

ワウテルセンは、一カ月後の一六一五年二月二十八日付のスペックス宛の書状で、十二日間の京都滞在中に、同月十五日に売却した商品として、次のものを列記している。

【史料四】⁹²⁾

二六七番 褐色の大羅紗一反、長さ 五と二分の間 一間当たり一二五匁⁹³⁾

三〇〇番 淡い深紅紫色の大羅紗の半分の長さのもの一反、長さ 六と三分の間 一間当たり一三〇匁⁹⁴⁾

橙色のスタメット織物一反、長さ 十と六分の五間 一間当たり一一八匁⁹⁵⁾

この売却商品リストでは、商品の色と種類、販売した長さおよび

一間当たりの販売価格が記され、最初の二つについては商品番号も付されている。最初に挙げられている「褐色の大羅紗」の一間当たりの価格一二五匁を現在の貨幣価値に換算すると約二十五万円に相当する⁹⁶⁾ので、高価な毛織物として流通していたことが窺える。また、このリストの直後に「赤色、黒色、橙色の大羅紗には需要が大きかった」と付記されていることから、この時期、京都では赤色や黒色、橙色といった鮮明な色合いの大羅紗に需要があったことがわかる。

約二カ月後の五月一日付でワウテルセンが大坂から発信した書状では、「当地で大羅紗三十ないし四十反が手元にあつたら良かったのに。というのは、それらは戦時中に最も需要があるからである」と記されている⁹⁷⁾。この記述からは、大羅紗が当時、軍需品の一つとして認識されていたことがわかる。

ヨーロッパ産の毛織物を最初に日本へ伝えたのはポルトガル人であつたが、次にスペイン人、十七世紀に入ると、オランダ人といギリス人が加わつた⁹⁸⁾。オランダの都市ライデンでは、十六世紀末頃から南ネーデルラントからの毛織物生産者が移住してきたことにより、毛織物工業が発展した。その勃興期の中心的な製品はサーイやバーイなどの薄手の新毛織物であつたが、イギリス製品との競争を避けるために、次第に生産の中心は、高価な上質紡毛織物である大羅紗（ラーケン）に移っていった⁹⁹⁾。

前述の通り、大羅紗はほかの織物に比べて防寒・防水性が高く、日本では戦場で陣羽織として用いられた。また、緋色をはじめとして鮮やかな色彩の羅紗は、「初期には武士階級にとつての派手やかな威厳と権威の象徴」となっていたという。⁽¹⁰⁾ 平戸商館から家康や幕府高官へ送られる献上品のリストにも大羅紗が高い頻度で見られる。平戸商館としては、この時期、日本で需要の高い生糸・絹織物・陶器などの中国産品物の入手が困難であったため、本国オランダ産製品の市場開拓先として需要の見込まれる日本に大羅紗を持ち込み、その販売に期待をかけていた。

ところが、畿内における大羅紗の販売はオランダ人の期待通りには進まなかった。大坂冬の陣の後、徳川方と豊臣方の間に和議が成立していたが、その後も豊臣方に埋め立てた堀の掘り返しなどの不穏な動きがみられたため、徳川方は豊臣方の再度の挙兵を警戒していた。⁽¹⁰²⁾ 家康と秀頼との間に再び戦争が起ころうという情報を耳にしたワウテルセンは、同五月一日付書状で、「再び何らかの問題が起ころうならば、私の手元にある物と堺に置いてある物をすべて携えて、近いうちに京都に赴くつもりである」と記し、会社の荷物を安全な場所に避難させる心積もりをしていた。⁽¹⁰³⁾ この直後に平戸から商務員テン・ブルツケが畿内に派遣されてきたが、大坂での戦乱状況を受けて、地元の商人シチロウエモンおよびスケサエモンの意見を聞いた上で、テン・ブルツケが室津に待機させていた大羅紗および反物

をすべて尼崎経由で京都に避難させることを決定している。⁽¹⁰⁷⁾

一六一五年五月十五日に京都に入った家康が、十九日には秀忠と二条城で密議を行い、二十二日には関東の諸軍が京都に到着するという状況のなかで、⁽¹⁰⁸⁾ 京都に滞在しているワウテルセンとテン・ブルツケは、五月二十八日付の連名で出したスベックス宛の書状で、次のように報告している。

【史料五】⁽¹⁰⁹⁾

現在、当地〔京都〕に関東のほとんどの領主が集まっているのに、今これ以上売れないことが不思議である。というのも、今月二十日に当地に到着した大御所および王であるその息子〔秀忠〕が二十五万人以上の兵士を連れて来ていると皆が言っている。

当時、京都に移した平戸オランダ商館の販売商品が相当量あり、京都に多くの武将が集まっている機会に、それらの商品への需要があると見込んでいたが、期待したような買い手が現れなかったようである。大坂の陣が終わり、大坂を引き上げた家康たちが京都に滞在している間の販売状況についても、ワウテルセンは六月二十九日付の書状で、「現行の取引の成り行きは非常に弱い」と報告しているが、その一方で、「今後、大御所と彼の息子が出発すれば、すべてにおいてきつと需要が出ると確信している」との予想も書き記し

ている。⁽¹¹⁾

大羅紗やそのほかの商品に需要がない理由として、ワウテルセンは京都から発信した一六一五年八月十五日付の書状で次のように記している。

【史料六】⁽¹²⁾

当地には現在、領主がこんなに大勢いるのに、大羅紗やほかの商品の需要がこんなにも少ないのは悲しいことである。とはいえ、領主たちはお互いをもてなすのにお金をたつぷりと使っているようである。というのは、現在商売が少ないことに皆が文句を言っている。従って、辛抱をもつて別の時を待つべきである。

ワウテルセンは、これより十日前の八月五日付の書状でも、「商人たちが現在大羅紗を買わない理由は、領主たちがお互いをもてなす必要があつて、それにそのお金をたつぷりと使っているようだからである」と述べていた。⁽¹³⁾ これらの記述からは、大坂夏の陣が終わった後も畿内に滞在している多くの武将たちが互いにもてなし合うことにお金を回しているため、彼らの購買力が大羅紗をはじめとする商品に向かつていない状況であつたことが窺われる。

また、九月二日付の書状でも、ワウテルセンは「商人たちに胡椒、

黄色と青色の大羅紗を入手したと知らせたにもかかわらず、その買い手はまだいない」と報告し、「大羅紗には現在まったく需要がない」理由について、「領主たちがそれにまつたく関心を示さず、商人たちはまだ十分在庫があるからである」と記している。そのうえ、スペイン人も浦賀に大羅紗を運んできたため、大羅紗の価格が下がるだろうとの悲観的な予測を記している。⁽¹⁴⁾

その後、一六一六年二月五日付の書状でも「大羅紗がとても安い値段になつている」との記述がある⁽¹⁵⁾はか、同年二月十七日付の書状では、ワウテルセンのところにある商品、主として大羅紗の売却を進めるようにスペックスから指示を受けているが、「現在、購入するどころか何かを見に来る商人すら得ていない」と報告している。⁽¹⁶⁾

以上にみたように、当初のオランダ人の見込みでは日本で需要があると考えられていた大羅紗は、販売品および献上品としての一定の需要があつたといえるが、この時期の冬夏二度にわたる大坂の陣の戦乱も影響して、平戸商館が期待していたような販売結果にはならなかった。また、大羅紗は高価な商品でもあつたため、その売れ行きは、家康や諸大名など富裕層の購買動向に大きく左右された。

では、大羅紗をはじめとする舶載商品はどのように販売されていたのであろうか。次節では、商品の販売形態について、日本人商人、特に宿主との関係に注目して、具体的に検討していく。

第二節 京都の宿主との協力関係

平戸商館が日本において舶載商品を販売するにあたって、地元の宿主との協力は欠くことのできないものであった。本節では、ワウテルセン発信書状にみられる畿内での商務活動において、京都の宿主の果たした役割に注目して、畿内駐在のオランダ人商務員と宿主との関係が示されている記述を史料から拾い上げ、両者の関係と宿主の役割がどのようなものであったのかについて探っていく。

ワウテルセンは、畿内駐在中、当初は堺、大坂、京都の各地にその時々々の用務に応じて滞在していたようであるが、大坂冬の陣で堺と大坂が戦乱に巻き込まれた状況を受けて、一六一五年五月に、焼き討ちの心配がないとされた京都に荷物を移し、戦乱が治まるまで主な活動拠点とすることになる。

大坂の夏の陣が始まろうとしている時期に、豊臣方との戦いのために家康や秀忠をはじめ、多くの幕府側の大名とその軍勢が京都と伏見に集まってきたという状況のなかで、ワウテルセンとテン・ブルツケはしばらく京都に滞在している。この期間中に一六一五年五月二十八日付で両者の連名で発信された書状には、オランダ人と地元の宿主との関係を伝える興味深い内容が記されているので、以下で詳しく取り上げる。

まず、同書状では、オランダ人の京都における宿主が「ヨヒヨウエ殿」¹⁷という名で「二条室町薬師ノ町」¹⁸に居住していると明記され

ている。(図2)

また、同書状には、宿主に預けられていた平戸商館の商品がどのように売買されていたかを伝える記述がみられる。

【史料七】¹⁹

我々の宿主ヨヒヨウエ殿から聞いたところ、今我々が滞在している京都の家においてクロベエ殿の息子²⁰によって売却された大羅紗およびスタメット織合わせて十九反は、帳簿に付けられた価格よりも約三千匁高く売却されていた。

この記述からは、クロベエという商人の息子が京都の宿主の家で平戸オランダ商館の商品の販売活動を行っていたこと、つまり、荷主の預けた商品が委託販売の形で宿主の家を商いの場として宿主以外の商人同士の間で売買されていたことが分かる。さらに、同書状において、この記述の直後に、「我々の宿主はそれが何月何日に誰にいくらで販売されたかを記録し、それを我々に見せてくれた」という記述もみられる。この記述からは、宿主の家で取引された商品について、取引日、取引相手、取引価格を記録し、荷主に報告するという代理人的役割を宿主が担っていたことが窺える。畿内で商品の販売管理のために派遣されているワウテルセンの担当業務の一つが、宿主から売却商品の種類・数量・価格について報告を受け、そ

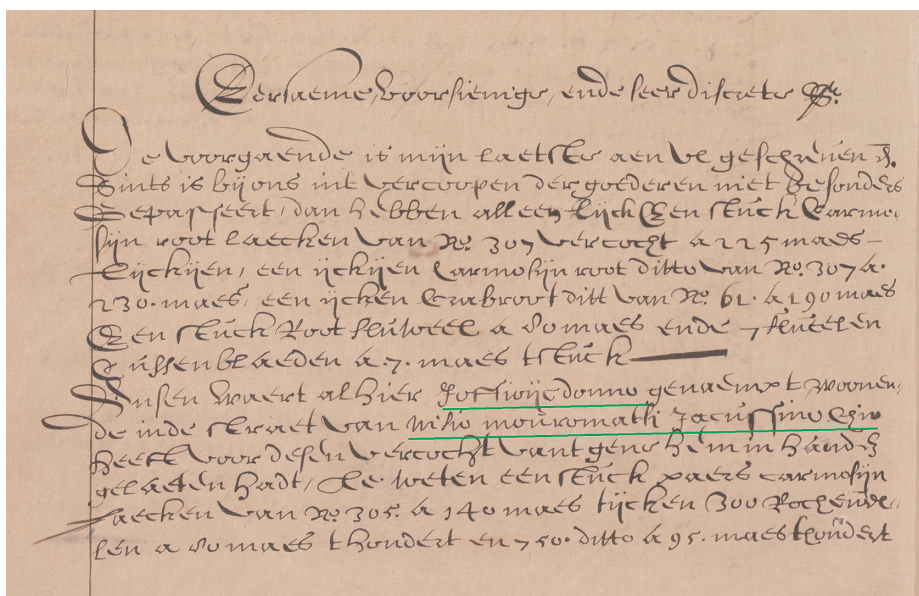


図2 エルベルト・ワウテルセンおよびマティス・テン・ブルッケ発信ジャック・スペックス宛
1615年5月28日付書状の抜粋（下線は筆者による）

下から6行目の下線部分に「Joffioije donno（ヨヒョウ工殿）」、下から5行目の下線部分に「Nisio Mouromatsi Jacussinochio（二条室町薬師ノ町）」と記されている。

（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.21, no. 276, fo. 18v）

れを平戸にいる商館長に書状で伝えるという、現地の宿主と連携した商品管理業務であった。

また、同書状には、オランダ人商務員と宿主や地元商人との関係を示す記述もみられる。

【史料八】⁽²¹⁾

シチロエモン殿および我々の宿主であるヨヒョウ工殿からの助言を聞いた上で、マティス・テン・ブルッケおよび前述のシチロエモンが当地に後七／八日残ることを相互に決定した。

この記述からは、大坂夏の陣の余波を受けた商業面における混乱状況のなかで、平戸オランダ商館の商務活動をどのように進めるべきかについて、地元の宿主および商人と相談の上で決定していること、日本の商人が、オランダ人と行動を共にするなど、平戸オランダ商館の商務活動に積極的に関与・協力していることが窺える。

その後、一六一五年十一月二十五日付のワウテルセンの書状によると、京都の宿主ヨヒョウ工は、オランダ人との取引に積極的に取り組もうと考えたのか、居住していた家を購入したのを機に、一六一五年末に、平戸オランダ商館から送付される荷物を保管するため防火構造の蔵を家の裏に建てることにした。⁽²²⁾ ワウテルセンから蔵の建造計画について知らされたスペックスは、できるだけ頑丈な蔵

をすぐに建てるよう勧めるべきであるとの返答をしている。⁽¹²³⁾ 蔵の大きさについて、当初、宿主が伝えた寸法は長さ四間、幅二と二分の一間であったが、京都の宿主はスペックスから大きさについての指示を受けるまで建設を控えるという態度を示している。⁽¹²⁵⁾ その後、蔵の建築を進めるにあたって、ワウテルセンはスペックスの指示に従って五百ないし六百匁⁽¹²⁶⁾を貸す予定をしていた。⁽¹²⁷⁾

このように、京都の宿主は平戸オランダ商館の商品保管庫として蔵を新築することに決め、商館側もこの計画に賛同し、蔵の寸法について相談の上で進めるとともに、建築資金を貸す予定をしていた。これらの交渉はすべてワウテルセンが間に入る形で行われており、この時期に京都の宿主とワウテルセンとの間に親密で強固な信頼・連帯関係が培われていたことが示唆される。一六一六年二月十七日付の書状で、ワウテルセンは京都の宿主ヨヒョウエについて、「貴殿〔スペックス〕が我々の宿主を親切な人物だと考えていることについて、私も彼にはそうでないところを見いだせない」との評価を述べている。⁽¹²⁸⁾

その半年後、一六一六年九月に貿易地制限令が出された際に、外人との取引を差し控える商人たちに対して、京都の宿主ヨヒョウエは、商館の商品を自分の名前で引き渡すことを提案し、商館のために便宜を図っている。ワウテルセンはスペックス宛一六一六年十月十一日付書状で次のように報告している。

【史料九】⁽¹²⁹⁾

彼らは我々の間にある値段の齟齬よりも將軍の禁令の方を問題視していたので、我々の宿主ヨヒョウエ殿は自分の名前でそれを渡しても良いと言った。というのは、もしも何らかの面倒が生じたら、まだ下にいる彼の息子がそれを購入し、当地に送ったのだと彼は言うつもりであった。

このように、京都の宿主は、貿易地制限令発令後もワウテルセンが畿内における商館の在庫商品を販売できるように、以前から平戸に商品買い付けに行くこともあつた自分の息子が現地で購入した商品であると言いつつ提案までもしていた。

そればかりか、貿易地制限令が出された後もワウテルセンを長く京都で止宿させたことで、その後、投獄されている。⁽¹³¹⁾ これらのことも京都の宿主とワウテルセンとの間の強い紐帯を示している。

大坂にも当初「アマノヤ・クロベエ」という宿主がいたが、大坂の陣の際に平戸商館が預けていた商品の代金支払いをめぐって訴訟事件にまで発展し、その後は「コミヤ・クロベエ」という別の宿主に替えている。⁽¹³²⁾ 一六一六年二月十七日付のワウテルセン発信書状によると、この新たな宿主は、ヨヒョウエの親戚で、「大坂の川沿いの淡路と呼ばれる通りに住んでい」て、「大坂の統治者である松平下総殿〔忠明〕にとっても気に入られている」人物であつたという。⁽¹³⁴⁾

さらに、ワウテルセンは、同年五月十二日付書状で、「彼が裕福な人であるにもかかわらず、従事してもらうべき宿主としては大坂中でこれ以上良い者は見つからない」との意見をスペックスに伝えている。¹³⁵

以上のように、本節で取り上げた、平戸オランダ商館と宿主との関係を示す事例からは、両者の間に緊密な協力・連帯関係が築かれていたことが分かる。平戸オランダ商館の初期の時代においては、家康がオランダ人に対して商売の自由を認めていたため、通行・商品運搬などの面においてオランダ人がある程度の自由裁量を享受していた一方で、地元の宿主や商人の持つ既存の流通経路や商売に関する情報に依存し、彼らの協力のもとで商務活動を進めるという部分も大きかったと言える。

ワウテルセン発信書状からは、平戸オランダ商館から商館員が商用で畿内各地に派遣される際には、各地における特定の「宿主」の家に滞在し、そこを拠点として様々な商務活動を行っていたことが分かる。その書状にみられる「宿主」は、商館員の派遣先での滞在場所と商品の保管場所を提供する役割のほかに、商務における助言者として特別な役割を果たしていた商人を指して用いられている。単に取引があるだけの地元の一般商人にこの用語が用いられることはないので、宿主と一般商人は明確に区別して認識されていたことが分かる。

また、このような「宿主」の役割から考えて、ここでのいう「宿」や「宿主」の家は、專業の宿屋や旅籠屋とは性格の異なるものであったと考えられる。平戸オランダ商館に対して宿主が果たしていた具体的な役割として、前述の役割のほかに、商品や書状の運搬・移送の補助、商館の商品の代理販売、他の商人たちによる商館の商品の取引管理・支援などがあった。なお、イギリス商館も日本各地に特定の宿主との関係を持ち、そこを拠点に商務活動を行っていた。

その後、鎖国政策下でのオランダ商館長による参府の際に、京都の海老屋などの「阿蘭陀宿」がオランダ人の定宿としての役割を引き継ぐことになったが、阿蘭陀宿は外国使節の宿泊所としての性格が強かった。阿蘭陀宿では、到着から出発まで担当役人の監視・管理のもとで既定の業務と職務が行われた。¹³⁶ 商品の販売については、阿蘭陀宿で幹旋はするものの、代理販売は行われなかった。

なお、日本側史料にみられる「宿主」のありかたについては、近世において商人を止宿させる様々な形態の商人宿が形成されていたようである。商人宿・宿については、杉森玲子『近世日本の商人と都市社会』に詳しく、「宿での商人による売買は本源的な取引の形態であり」、「商人と宿や問屋を軸に売買の局面が構成されていた」との指摘がされている。¹³⁷ 本稿で扱ったワウテルセンの商務報告からも、宿主の家は、オランダ人の宿泊場所であるとともに、商人たちが集って売買を行う場でもあり、商品を集積・保管する問屋的機能が

をも併せ持っていた実態が窺われる。

さらに、京都の宿主ヨヒヨウエの息子スケサブロウは平戸と京都の間を往復し、平戸商館から生糸などの商品を直接購入することもあったので、京都の宿主が三井高房「町人考見録」にみられる「長崎問屋」のような貿易品の問屋の機能を有していたことも窺われる。¹³⁸

また、平戸オランダ商館が京都における拠点としていた宿主ヨヒヨウエの家は、織物関係の商いの中心地であった室町筋にある二条室町薬師町に位置していた。オランダ人の販売する商品には大羅紗など幕府高官・大名向けに需要のある商品の占める割合が大きかったことから、杉森哲也「呉服所と京都——秋田藩を事例として」で検討されている「呉服所」のような存在であったかもしれない。¹³⁹ 同論文によれば、「一般に呉服所とは、禁裏・幕府・諸大名に出入した呉服類の調達を行う御用商人である」とされる。したがって、平戸オランダ商館の宿主もこの呉服所あるいはその前身のような存在であった可能性がある。

第三節 オランダ人の販売商品の対価

ワウテルセンが畿内で販売していた商品は、第二章第一節で取り上げた大羅紗をはじめとして、天鵝絨、スタメット織、駱駝毛織物、リネン布地、繻子、緞子、紗綾、綸子、インド更紗など各種織物類および陶器などの製品、および、中国産生糸、蘇木、鹿皮、鮫皮、

象牙、緑青の染料などの原料、また、胡椒、ナツメグなどの香辛料であった。

一方、これらの商品を売却することによって、オランダ人が得ていた対価はどのようなものであったのか。

オランダ人が最も必要としていたのは銀であった。アジア海域において通貨として用いられる銀の不足を認識していた当時の商務総監クーンは、集められる限りの最上質の精錬銀を日本からオランダのアジアにおける拠点であるバンテンに送付するようスペックスに書状を通じて指示している。¹⁴⁰ このほかに、商務総監から送付するよう指示のあったものには、銅や樟脳、漕ぎ船、斧、砂糖漬け生姜、塩漬けまたは乾燥させた肉・魚などの食糧品などがあった。このような必需品以外にも、現地の王侯向け贈答用の刀や「祖国向けの漆器一揃」などが、日本への注文品リストに挙げられている。¹⁴¹

このクーンからスペックスへの送付指示を反映して、ワウテルセン発信書状では、丁銀、精錬銀、高品質の灰吹銀などの商業流通用の各種銀、精錬銅、木材、火薬の材料として用いられる硝石などの各種原料、また、刀、槍、鎖帷子、火縄銃などの武器、漆器を畿内で入手し、平戸へ送付していたことが折々に伝えられている。

一例として、ワウテルセンが六一五年十一月三日付書状とともに平戸にいるスペックスのもとへ送付した貨幣や仕入れ商品などの金品の送付物リストを示す。(表2)

この送付物リストから、ワウテルセンがこの時平戸へ送付した金品のうち、丁銀および精鍊銀などの銀が総額の大半を占めていたことが分かる。そのほかに仕入れ商品として、銅製品、精鍊鋼鉄、日本製布が送付された。また、精鍊銀の交換手数料が六パーセント、あるいは百匁当たり七匁ないし七匁九分であったこと、銅と鋼鉄の購入手数料が一パーセントであったことも記されている。送付総額は約八万三三三〇匁とかなりの額に上っている。

また、この送付物リストには、「金屏風一双」も送付されたことが記されているが、この品目には金額が記載されていない。この送付物リストの後に続いて記載されている送付品の梱包品明細書の方には、「四十八番 一双の金屏風」とあることから、この金屏風は購入品ではなく、商館への贈答品あるいは返礼品として受け取られたものかもしれない。そのために金額が明記できず、帳簿外扱いになっているのであろうか。

さらに、このほかの例として、まとまった量の漆器を平戸に送付している記述も、ワウテルセン発信書状に時折見受けられる。各種漆器が、一六一五年十一月二十五日付書状とともに二一〇五匁分⁽⁴³⁾、一六一六年二月十七日付書状とともに七五三六匁分⁽⁴⁴⁾、一六一六年四月二日付書状とともに九六五匁分⁽⁴⁵⁾、一六一六年九月十一日付書状とともに二六二一匁分⁽⁴⁶⁾、一六一六年十一月十九日付書状とともに四〇六三匁分⁽⁴⁷⁾、それぞれ送付されている。

送付された漆器のリストによると、書筆筒、湯桶、盃、盆、入れ子の洋櫃、食卓などの形態のものがみられる。特に、書筆筒については、スペックスからの細かい指示のもとに特注で職人に製作させていたようである⁽⁴⁸⁾。ワウテルセンは、スペックスの注文・指示に基づいて、漆器の製作や支払いに関する交渉を京都の漆職人を行う役割を担っていた。

以上のように、ワウテルセンが畿内で販売した商品の対価として、最も望まれていたものは銀であったが、そのほかにも銅や木材などの原料、武器類、漆器なども獲得対象品に含まれ、それらを手し、平戸に送付していたことが分かる。

おわりに

以上のように、本稿では、初期の平戸オランダ商館の商務活動について、商務員ワウテルセンの発信書状を中心にその実態について検討した。

その結果、まず、一六〇九年の商館開設時から三年間の状況については、舶載商品が乏しい状況のなか、アダムスなどの協力を得て販売活動が行われていたこと、また、ワウテルセンが来日した一六二二年後半からは、オランダ船の日本への来航はなお不安定な状況ながらも、商品供給の道筋がつき、また、それまでアダムスに委託

して行われていた商品販売がワウテルセンによつて引き継がれるようになつたという変遷過程を明らかにした。

そして、ワウテルセンの畿内における具体的な商務活動の検討に入る前に、ワウテルセンの商館員としての経歴について情報の整理を行い、ワウテルセンの勤務状況や勤務上の能力を把握するとともに、ワウテルセン発信書状とそれが含まれるスベックス受信書状綴帳の形態や内容について詳述し、日本商業史研究における意義と重要性を指摘した。

そのうえで、ワウテルセンが畿内で行つていた主な商務活動のうち、大羅紗の販売、宿主との関係、そして販売商品の対価物に注目して、それぞれの関連記述を史料から拾い上げて実証的に再構築することに、その活動の一端を具体的に提示するとともに、その実態の分析を試みた。その結果、以下のことが明らかになつた。

まず、大羅紗の販売と需給動向については、需要が見込まれていたにもかかわらず、大坂の陣による商業活動の混乱の影響と需要の低迷のために、平戸商館が期待していたような販売結果につながらなかつたという実態が史料から浮かび上がった。

また、オランダ人の畿内での商務活動における地元の宿主との関係については、関連記述を史料から抽出し、日本の商習慣として捉え直して、宿主の役割や取引態様を分析した結果、平戸オランダ商館に対して宿主が果たしていた具体的な役割として、商館員の派遣

先での滞在場所と商品の保管場所を提供する役割に加えて、商務に関する助言、商品や書状の運搬・移送の補助、商館商品の代理販売、商館商品の取引管理・支援などの役割があつたことを指摘した。本稿で取り上げた事例からは、オランダ人と宿主の間に緊密な協力関係が築かれていたことも明らかとなつた。

さらに、オランダ人が各種織物類や生糸・蘇木・鹿皮などの商品販売を通じて得ていた対価物について、関連記述を拾い上げて検討した結果、主力を注いで獲得に励んでいたのは商業流通用の銀であつたこと、また、そのほかにも銅や木材、そして、刀、槍、鎖帷子、火縄銃などの武器に加えて、漆器などの工芸品も対価として入手していたことを指摘した。

最後に、本稿で示した様々な事例から、貿易地制限令以前に日本で活動したオランダ人は、かなりの自由を享受しながら、自律的に貿易・商務活動を采配し、家康をはじめ幕府の高官や関係役人、地元の商人とも直接対面して、様々な交渉や請願、商取引を行つたという実態が浮かび上がる。これは、これまでの先行研究において詳細に検討されてこなかつた点である。永積洋子は、「第一期つまり、自由貿易期には、取引はオランダ商館長の意のままに行われた」と概括するに留まつている。¹⁹⁾とはいえ、このような特権的な立場は、家康がオランダ人に与えた厚遇に依拠したものであり、自由取引できる環境は貿易地制限令以前の時期に限定して成立したも

のにすぎなかった。その後の在日本オランダ商館は、その特権を取り戻そうとしたが、幕末の商館閉鎖時に至るまでついに取り戻すことはできなかった。¹³⁰⁾

今後の課題として、東インド会社の対日貿易方針や平戸オランダ商館の取引構造の中で畿内における商務活動がどのように位置づけられるのかについて解明していくことが挙げられる。本稿で取り上げた活動以外にもさらに考察事例を拡大し、多角的に研究を進めたい。うえで、全体像を明らかにしていきたい。

本研究の一部はJSPS科研費19K01010の助成を受けたものである。

注

(1) オランダ語原文では、「waert」と表記されている。Woordenboek der Nederlandsche Taal. M. Nijhoff, 's-Gravenhage, 1882-2001. によると、中世オランダ語の「gastheer, hebergier (宿の主人、宿主)」の意。現代語では「ward」で、日蘭学会編『講談社オランダ語辞典』講談社、一九九四年によると、「居酒屋」「居酒屋」の主人」との訳語が付されている。また、東京大学史料編纂所『オランダ商館長日記 訳文編』などにおいても「宿主」という訳語が用いられているように、「宿主」が当該分野の先行研究で通用しているので、本稿においても「宿主」の訳語を用いている。

(2) Verenigde Nederlandsche Oost-Indische Compagnie。略称は「VOC」。

(3) 現在の地方行政区分では長崎県平戸市に属する。

(4) この法令の伝達と日本側史料について、永積洋子『平戸オランダ商館日記 近世外交の確立』講談社、二〇〇〇年、二十二頁、一八〇～一八一頁を参照。

(5) 東京帝国大学文学部史料編纂掛『大日本史料』第十二編之二十三、東京帝国大学、一九三二年、六三二～六六八頁。

(6) 岡田章雄「近世に於ける鹿皮の輸入に關する研究(二・完)」『社会経済史学』七(七)、一九三七年、八六六頁。岡田章雄「近世初期に於ける主要なる輸入物資について」史学会編『東西交渉史論』上巻、富山房、一九三九年、五九九頁。

(7) 前掲『平戸オランダ商館日記 近世外交の確立』二十二頁。

(8) 加藤榮一「連合オランダ東インド会社の戦略拠点としての平戸商館」田中健夫編『日本前近代の国家と対外関係』吉川弘文館、一九八七年、四六五～四六六頁。

(9) 行武和博「家康政権の対外政策とオランダ船貿易——『平戸商館初期』の日蘭貿易実態(一六〇九～一六一六年)——」『東京大学史料編纂所研究紀要』十七、二〇〇七年、九五五～九七頁。

(10) フレデリック・クレインス「オランダ人が見た大坂の陣」磯田道史ほか著『戦乱と民衆』講談社、二〇一八年、五十三～八十二頁。

(11) 一六一三年にリチャード・コックスを商館長として平戸に開設され、一六二三年に閉鎖された。

(12) 一六一三年から一六二三年まで平戸イギリス商館長として在任。

(13) イートンについてはワウテルセンの書状でも度々言及され、京都や大坂堺、江戸で活動していた様子が報告されている。また、ワウテルセンとスベックスは、平戸と畿内を往復するイートンを通じて、書状の受け渡しを依頼することもあったようである。

(14) 初代・第三代平戸オランダ商館長。在任期間一六〇九年九月二十日～一六二二年八月、および一六一四年八月～一六二二年十月二十九日。

「Jacques」のカタカナ表記については、「ヤックス」とする先行研究もあるが、本稿では、オランダ語話者の発音により近いカタカナ表記を採用し、「ジャック」と表記する。なお、「Jacques」は、史料において「Jacobus」と記されている場合もあるが、本人の署名は「Jacques」と綴られている。

- (15) ジャック・スペックスよりランベルト・ヤコブセン・ヘイン宛書状、平戸、一六一〇年十一月付（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.02, no. 1054, fos. 6-9）。

- (16) 原文では「Jasmondonne」と表記。「Jasmondono」、「Jasmondono」、「Jasmondono」などと表記される場合もある。朱印船貿易家の木屋弥三右衛門か。

- (17) 前掲ジャック・スペックスよりランベルト・ヤコブセン・ヘイン宛書状、平戸、一六一〇年十一月付。「ジャック・スペックス」よりランベルト・ヤコブセン・ヘイン宛書状、平戸、一六一〇年十一月八日付（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.02, no. 1054, fo. 9）。

- (18) 「ジャック・スペックスおよびピーテル・セーヘルセンの参府日記」、一六一一年七月一日〜九月二十八日（Isaac Commelin, *Begin ende voortgangh van de Verenigde Nederlandsche Grootgetende Oost-Indische Compagnie s.n.*, Amsterdam, 1646, vol. 2, *Oost-Indische Voyagie onder den Admirael W. Verhoeven*, ff. 72-98）七月十日条。

- (19) 同右「ジャック・スペックスおよびピーテル・セーヘルセンの参府日記」、一六一一年七月一日〜九月二十八日、七月十日条。

- (20) Brak（ヤヒト船「百トン」）。「Brack」とも表記される。一六一〇年一月三十日にオランダを出航し、パンテンに向かい、一六一一年にパタニから平戸に向かった。

- (21) オランダ語原文では「jaecken(en)」と古い綴が用いられているが、現代語の綴では「Jaken(s)」。

「ラーケン織」が用いられている場合が多いが、日本史学分野では「大羅紗」という用語が定着しているので、本稿でもこれに倣う。

- (22) 「ジャック・スペックス」よりアムステルダム支部宛書状、平戸、一六一一年十月二十七日付（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.02, no. 1054, fos. 93-94）。

- (23) ヘンリック・ファン・ラーイより「十七人会」宛書状、パタニ、一六一〇年十月八日付（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.02, no. 1054, [「パタニの部」] fos. 3d-40）によると、マニラからパタニに逃れて来たヤヒト船パウ号に乗船していた商館員ピーテル・セーヘルセンが同地に残り、その後一六一一年にブラック号で平戸に渡航した。

- (24) 前掲「ジャック・スペックスおよびピーテル・セーヘルセンの参府日記」、一六一一年七月一日〜九月二十八日、九月一日条および九月二日条。

- (25) 前掲「ジャック・スペックス」よりアムステルダム支部宛書状、平戸、一六一一年十月二十七日付。

- (26) ウイリアム・アダマスについては、岡田章雄『三浦按針』思文閣出版、一九八四年やフレデリック・クレインス『ウイリアム・アダマス——家康に愛された男・三浦按針』（ちくま新書）筑摩書房、二〇二一年、P. G. Rogers, *The first Englishman in Japan: The story of Will. Adams*, Harvill Press, London, 1956. に詳しい。

- (27) 「ジャック・スペックス」より「ウイリアム・アダマス」宛書状、平戸、一六二二年四月五日付（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.02, no. 1054, fos. 12-13）。「ジャック・スペックス」より「ウイリアム・アダマス」宛書状、平戸、一六一一年「一六二二」の誤記、年六月八日付（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.02, no. 1054, fos. 10rv, 15v）。「ジャック・スペックス」より「ウイリアム・アダマス」宛書状、平戸、一六一二年六月二十日付（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.02, no. 1054, fos. 16rv）。

- (28) 同右「ジャック・スペックス」より「ウイリアム・アダマス」宛書状、平戸、一六一一年「一六二二」の誤記、年六月八日付。なお、本稿におけるオ

ランダ語史料からの引用の和訳文については、VOC文書の専門家シンシア・フィアレ氏による翻刻をもとに、フレデリック・クレインスおよびクレインス桂子が翻訳した和訳を使用している。以下同様。翻刻、和訳ともに現時点では未刊行の状態であるが、今後、校閲作業を経て史料集として順次分冊刊行予定である。

- (29) オランダ語原文において織物類に用いられている数量単位「stuk」の訳語については、先行研究では「反」が用いられている。ヨーロッパ産毛織物は折り畳んだ形で運搬されることが多く、必ずしも巻物の形態ではなかったが、通例に従って、日本の反物を数える単位と同様に、本稿でも「反」を用いる。なお、ヨーロッパ産の織物は産地や種類ごとに規格が異なり、当時のオランダ産の毛織物には、産地や長さを記した「het loodt (鉛の札)」が出荷時に付けられていた。また、アジア産のものとは長さや幅の規格が違うことに留意する必要がある。

- (30) 一尋は約一・八メートル。

- (31) 前掲「ジャック・スペックス」より「ウィリアム・アダムス」宛書状、平戸、一六二二年四月五日付。この書状では、和暦十一月二十四日付の浦賀からのアダムスの書状が一六二二年三月二十日に手元に届いたことが伝えられているとともに、同アダムス書状における大羅紗販売に関する報告内容について言及されている。

- (32) Frederik Caspar Wieder, *Het eerste Hollandsche schip in Japan*. (Werken uitgegeven door de Linschoten-Vereeniging; 24. De reis van Manu en de Cordes door de Straat van Magalhães naar Zuid-Amerika en Japan, 1598-1600. Martinus Nijhoff, 's-Gravenhage, 1925, vol. 3.) において、一六〇〇年に豊後に漂着したリーフデ号乗組員の生存者リストにはマチアスという名は挙げられていないので、商館開設後まもなく配属された東インド会社の商務員助手と思われる。

- (33) 京間一間（六尺五寸）は約一・九七メートル。

- (34) 「ジャック・スペックス」より「マチアス」宛書状、平戸、一六二二年六

月八日付（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.02, no. 1054, fos. 14r, 11v）。この覚書において、スペックスは最良品の大羅紗の一間当たりの価格を三三〇匁に設定している。

- (35) イギリス東インド会社が一六一三年十一月六日に平戸に商館を開設してから、アダムスは同国人であるイギリス人の日本貿易活動を手助けするようになり、雇用契約も結んでいる。

- (36) Wieder 前掲書によると、一六〇〇年に豊後に漂着したリーフデ号の生存者の一人であり、同書の生存者リストにおいて「Jan Cousynsen, Schienan (ヤン・コゼインス、甲板手)」と記されている。一六一一年のスペックスおよびセーヘルセンの参府の際に通訳として同行している。

- (37) 前掲「ジャック・スペックス」より「ウィリアム・アダムス」宛書状、平戸、一六二二年四月五日付。この書状で、スペックスは、象牙や大羅紗の販売においてマチアスおよびコゼインスと相談のうえで進めるようアダムスに依頼している。

- (38) 一六〇九年九月二十日付ローデ・レーウ・メット・ペイレン号およびグリフィエーン号の決議録（ハーグ国立文書館所蔵 1.11.01.01, no. 1138）。この決議録によると、コゼインスの報酬は月に二十グルデンであった。

- (39) Rode Leeuw met Pijlen (四百トン)。一六〇九年にも平戸に來航。

- (40) 第二代平戸オランダ商館長。在任期間一六二二年八月〜一六二四年八月。

- (41) 「ジャック・スペックス」より「バタニ商館長ヘンドリック・ヤンセン」宛書状、平戸、一六二二年十一月二日付（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.02, no. 1054, fos. 18-19 草稿）。

- (42) 平戸商館・エンクハイゼン号・ヤカトラ号の決議録、平戸、一六一五年十月二十八日付（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.02, no. 1061, fos. 24v-252r）。

- (43) 行武和博前掲論文（九十二頁）によると、当時の換算比率は丁銀十匁Ⅱ・九三七五グルテンである。この数値に基づいて換算すると、四十五グルテンは約一五三匁に相当する。

- (44) ヤン・ピーテルスゾーン・クーンより「ジャック・スペックス宛」書状、バンテン、一六一五年六月十日付（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.21, no. 276, fols. 34v-37r）。東インド会社の下級商務員という階級は、商館長の地位に就く資格のある上級商務員に次ぐ地位で、船上勤務においては乗組員の各職種の中で高位に属するものであった。また、商館付勤務においては、各商館に上級商務員の定員は一人という規定があったので、今回の措置は例外的なものであったと推測される。
- (45) 「Melchior」のカタカナ表記については、「メルヒオール」と表記されることもあるが、第二音節「chior」は閉母音のため、文法上、短母音になる。本稿では、実際の発音に近い「メルヒヨル」と表記する。ファン・サントフォールトについては、森良和「メルヒオール・ファン・サントフォールト——日本で生きることを選んだリーフデ号船員の生涯」『論叢・玉川大学教育学部紀要』二〇一三、二〇一四年、八十一〜九十八頁）に詳しい。
- (46) ヘンドリック・ブラウエルよりメルヒヨル・ファン・サントフォールト宛書状、平戸、一六一四年九月四日付（François Valentyn, *Oud en Nieuw Oost-Indien*, Joannes van Braam, Dordrecht: Gerard onder de Linden, Amsterdam, 1726, vol. 5, pp. 26-27）。ファン・サントフォールトは当時堺に居住し、皮革類などを扱う貿易業を個人で行っていた。
- (47) ヤン・ヨーステン・ファン・ローデンスティンについては、岩生成一「日蘭交渉の先駆者ヤン・ヨーステン」『日本歴史学会』『日本歴史』一一七、一九五八年、十六〜二十九頁。または Seichi Iwao, *Jan Joosten: The forerunner of the Dutch-Japanese relation* (Bulletin of the Japan-Netherlands Society, no. 1), Tokyo, 1958, pp. 1-24. に詳しい。
- (48) ジャック・スペックスよりヤン・ピーテルスゾーン・クーン宛書状、平戸、一六一四年十二月二十九日付（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.02, no. 1058, fols. 114-122）。
- (49) 同右ジャック・スペックスよりヤン・ピーテルスゾーン・クーン宛書状、平戸、一六一四年十二月二十九日付。一六一一年七月のブラック号来航時から一六一四年八月のアウト・ゼーランドディア号来航時までの間に日本に來航したオランダ船は、一六一二年八月來航のローデ・レウ・メット・ペイレイン号と同年九月來航のハーゼウィント号のみであった。一六一三年にはオランダ船の來航はなかった。したがって、この期間の積荷の供給元として考えられるのは、一六一二年來航の二隻と一六一三年にブラウエルがシャムへ派遣したヨーステンの船に限定される。
- (50) エルベルト・ワウテルセンより「ジャック・スペックス宛」書状、大坂、一六一四年九月七日付（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.21, no. 276, fols. 1-2v）。ただし、平戸オランダ商館文書全体の中でのワウテルセンの最初の書状は、一六二二年十一月四日付のヘンドリック・ブラウエルより「バタニ商館宛」書状（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.02, no. 1054, f. 23）である。この書状は、新任平戸商館長ブラウエルが、参府途上から下級商務員エルベルト・ワウテルセンに指示して、代筆させたものである。発信場所は船での移動中のためか、「日本」と記されている。また、同書状の後半部分は、ワウテルセンがスペックスから聞いた現地の季節風と船便の事情を宛名人に伝えるために独自に加筆している。なお、この書状を除いて、伝存するワウテルセンのスペックス宛書状は、すべてスペックス受信書状綴帳（1.04.21, no. 276）に含まれ、一六一四年九月七日から平戸に戻る一六一六年十二月二十九日までの日付のものである。
- (51) *Oud Zeelandia*（スヒップ船、五百トン）。
- (52) 前掲ジャック・スペックスよりヤン・ピーテルスゾーン・クーン宛書状、平戸、一六一四年十二月二十九日付。
- (53) 前掲エルベルト・ワウテルセンより「ジャック・スペックス宛」書状、大坂、一六一四年九月七日付。
- (54) 前掲ジャック・スペックスよりヤン・ピーテルスゾーン・クーン宛書状、平戸、一六一四年十二月二十九日付。この書状にはワウテルセンの勤務態

度が忠実で勤勉であるとの評価も記されている。

(55) ワウテルセンと同様に平戸商館勤務の下級商務員。

(56) 前掲ジャック・スベックスよりヤン・ピーテルスゾーン・クーン宛書状、平戸、一六一四年十二月二十九日付。同書状には、「下級商務員エルベルト・ワウテルセンとマティス・テン・ブルッケを予定している参府および大御所様ならびにはかの領主たちへの贈物献上のために使節として派遣した。なぜなら、ブラウエル氏も私も、当地にいたる必要があつたので、前述の参府が行えないと判断したからである」と明記されている。なお、この時点で平戸商館に所属している下級商務員はワウテルセンと簿記作成担当のテン・ブルッケ二名だけであることも同書状で報告されている。また、前掲ヘンドリック・ブラウエルよりメルヒヨル・ファン・サントフォールト宛書状、平戸、一六一四年九月四日付にも、「エルベルト・ワウテルセンは、マティス・テン・ブルッケと共に大御所へ参府するための使節として任命された」との記述がある。「駿府記」によると、この年にオランダ人が家康に謁見したのは、慶長十九年九月一日（一六一四年十月四日）である。「駿府記」国書刊行会編『史籍雑纂 第二』国書刊行会、一九一一年、慶長十九年九月朔日条（二七〇頁）に、「今日阿蘭陀人御目見、献白糸二丸、龍腦二斤、丁子二囊、大木綿段子等献之、やようす出御前、虎子二匹引之来」とある。したがって、参府のために九月中には畿内を出発したと推測される。なお、岩生成一前掲論文（十七頁）によると、この年にスベックスが「挨拶の爲め江戸に赴き幕府に出頭し」たと記されているが、誤りである。また、リチャード・コックスよりソールズベリ侯宛書状、平戸、一六一四年十二月十日付（Anthony Farrington, *The English Factory in Japan 1613-1623*, The British Library, London, 1991, vol. 1, pp. 256-261）にも、この年のオランダの参府使節についての記述がみられる（二五八頁）。それによると、贈物を献上しに来た使節が重要人物ではなかつたことと贈物自体があまり価値のない品であつたことから家康に献上品の受け取りを拒絶されたと記され

ている。

(57) エルベルト・ワウテルセンより「ジャック・スベックス宛」書状、堺、一六一五年一月二十九日付（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.21, no. 276, fols. 5v-6r）には、「一六一五年」今月「二月」二十五日に道中つづがなく無事に堺に到着した」とある。また、メルヒヨル・ファン・サントフォールトより「ジャック・スベックス宛」書状、堺、一六一五年一月二十七日付（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.21, no. 276, fols. 1r-8v）にも、二十五日にワウテルセンに会つたことが伝えられていたとともに、家康と秀頼の間の和平がまだ平戸に伝わっていない段階で、道中の危険があつたにもかかわらず、スベックスがワウテルセンを派遣したことには十分な理由があり、結果的には良い時期に到着したとの意見が述べられている。この記述から、ワウテルセンは参府後、畿内から平戸に引き上げていたが、理由あつて再び派遣されたことが分かる。

(58) ジャック・スベックスよりメルヒヨル・ファン・サントフォールト宛書状、平戸、一六一五年一月九日付（François Valenry, op. cit., vol. 5, p. 27）。

(59) 「京都や大坂、堺などの」畿内に」の意。本稿で用いた平戸商館文書においては、オランダ人が平戸から京都や大坂、堺などの畿内に赴く際に、「bowen」という語が用いられ、畿内から平戸へ戻る際には、「bouden」、「naai onkedt」という語が使用されている。近世初期を経て都市として確立した江戸に対する「上方」という概念が生じる以前に、九州に対する「上方」という概念があつたことを踏まえて、和訳ではそれぞれ「上」、「下」と訳している。なお、中世末頃から戦国期にかけてのイエズス会士によるポルトガル語の文書などにも、畿内を指して「上（かみ）」、また九州地方を「下（しも）」と呼ばれていたことが示されている。

(60) エルベルト・ワウテルセンより「ジャック・スベックス宛」書状、京都、「一六一六年九月三十日付」（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.21, no. 276, フォリオ番号なし）。

- (61) エルベルト・ワウテルセンより「ジャック・スベックス宛」書状、大坂、一六一六年十一月十四日付（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.21, no. 276, フォリオ番号なし）。エルベルト・ワウテルセンより「ジャック・スベックス宛」書状、大坂、一六一六年十二月二十九日付（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.21, no. 276, フォリオ番号なし）。
- (62) 平戸イギリス商館長日記では、エルベルト・ワウテルセンの呼称は、その名「Elbert」をラテン語形にした「Albartus」となっている。また「Hollander from Misco」と記されていることもある。東京大学史料編纂所編纂『イギリス商館長日記 原文編』vol. I～III、東京大学出版会、一九七八～一九八〇年。
- (63) 同書、vol. II, p. 22, 1 February 1617条。この時期の平戸イギリス商館側史料ではユリウス暦を使用しているため、本稿の本文ではグレゴリオ暦に変換した日付を使用する。以下の平戸イギリス商館側史料の日付についても同様。
- (64) 同書、vol. II, p. 38, 3 March 1617条。
- (65) 原文では「Capt. Barkhout」と表記されている。生没年不詳。
- (66) 前掲『イギリス商館長日記 原文編』vol. II, p. 151, 20 August 1617条。
- (67) 同書、vol. II, p. 154, 26 August 1617条、p. 159, 5 September 1617条。
- (68) 同書、vol. II, p. 164, 13 September 1617条。
- (69) 加藤榮一前掲論文（四四八頁）によれば、一六一九年にワウテルセンが船長として平戸からシヤムへ渡航したとされている。ただ、ここで加藤の示している史料については、今のところ所在が確認できず、未見である。
- (70) 前掲『イギリス商館長日記 原文編』vol. III, p. 47, 10 February 1621条。
- (71) 原文では「Jacara」と表記されている。日本では「咬啗吧（ジャガタラ）」と呼称されていた。一六一九年にオランダ側では *Bravia* に改称されている。現在のジャカルタ。
- (72) *Muiden*（ヤヒト船、一六〇トン）。『イギリス商館長日記 原文編』では「Muyen」または「Mugon」と記されている。
- (73) 前掲『イギリス商館長日記 原文編』vol. III, p. 134, 27 July 1621条。
- (74) *Zwaan*（ヤヒト船）。『Swan』、『Swane』と記される。『イギリス商館長日記 原文編』では「Swan」と記されている。
- (75) 前掲『イギリス商館長日記 原文編』vol. III, p. 176, 4 October 1621条、p. 177, 6 October 1621条。一六二一年十月に出発したズワーン号は同年十二月にジャカトラに到着しているが、以降、ワウテルセンの名はオランダ側・イギリス側どちらの史料にも見られないため、ジャカトラからオランダに向かう帰国船に乗ったかどうかまでは未詳である。
- (76) ヤン・ピーテルスゾーン・クーンよりエルベルト・ワウテルセン宛書状、ジャカトラ、一六二〇年六月十三日付（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.02, no. 1071, fo. 107^v）。
- (77) 金井圓『日蘭交渉史の研究』（思文閣史学叢書）思文閣出版、一九八六年、三〇九～三二二頁。フレデリック・クレインス『オランダ商館日記』の研究『日文研』三十八、二〇〇七年、二〇三～二一〇頁。
- (78) スベックス受信書状綴帳におけるワウテルセンからスベックス宛書状のうち、(一)一六一四年九月七日付、(二)一六一五年二月九日および(三)一六一六年九月三十日付の書状については、同じ日付のものがそれぞれ二通ずつ存在する。(一)は業務報告を記した書状とそれに同封された相場表の二通、(二)は業務報告を記した書状とそれに同封された売却商品の覚書の二通、(三)は業務報告を記した書状と貿易地制限令について伝える内容の飛脚便の二通である。本稿では、同日付の書状で同封されたものも各一通として数えている。また、京都発信書状のうち、一六一五年五月二十八日付および一六一五年六月十一日付の書状は、ワウテルセンとテン・ブルツケ両名の連署で記されており、ワウテルセン単独の書状ではないが、ワウテルセン書状に含めている。また、ワウテルセンの多くの書状には、スベックスからの書状を受信した日付が冒頭部分に記されているのが特徴的

である。なお、スベックス受信書状綴帳の中で、ワウテルセンの最初の発信書状は一六一四年九月七日付のものであるが、平戸商館文書全体の中では、ブラウエルが日本からバタニ商館に宛てて発信した一六二二年十一月四日付の書状（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.02, no. 1054, fo. 23）の後半部分に、ワウテルセンが加筆している添え書きがみられるので、伝存しているワウテルセンによる執筆書状として、最も早い日付は一六二二年十一月四日付の書状である。

- (79) エルベルト・ワウテルセンより「ジャック・スベックス宛」書状、大坂、一六一六年九月八日付（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.21, no. 276, フォリオ番号なし）。

- (80) エルベルト・ワウテルセンより「ジャック・スベックス宛」書状、大坂、一六一六年九月十一日付（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.21, no. 276, フォリオ番号なし）。

- (81) 平戸オランダ商館文書の形態上の種別としては、書状のほかに、決議録・会計帳簿類・日記・報告書があるが、各文書の執筆目的はその内容や形態上の種別からある程度自明である場合が多い。

- (82) 行武和博前掲論文、九十五～九十七頁。

- (83) 石田千尋『日蘭貿易の史的研究』吉川弘文館、二〇〇四年、一二六頁、一三四頁、一四五頁。

- (84) 日本銀行金融研究所貨幣博物館の貨幣価値の目安によると、江戸初期（一六〇九年）の一金両（＝銀五十匁）は約十万円に相当するので、銀一匁は約二千元に相当すると推測される。

- (85) エルベルト・ワウテルセン、覚書、堺、一六一五年二月九日付（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.21, no. 276, fos. 10-12r）。

- (86) 京間一間・九七メートルとして換算すると、二十九・五五メートル。

- (87) 寸法の規格は産地や種類によって異なっていたようであるが、『日本大百科全書（ニッポニカ）』ジャパンナレッジ版の「毛織物」項目によると、一

般的な洋服生地としての寸法は幅一四五～一四七センチメートル、長さ二七・五メートルであった。

- (88) ジャック・スベックスより、アムステルダム の十七人会宛書状、長崎、一六二〇年十一月三日付（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.02, no. 1054, fos. 1-6）。
- (89) 前掲エルベルト・ワウテルセンより「ジャック・スベックス宛」書状、大坂、一六一四年九月七日付。

- (90) 前掲エルベルト・ワウテルセンより「ジャック・スベックス宛」書状、堺、一六一五年一月二十九日付。

- (91) 同右エルベルト・ワウテルセンより「ジャック・スベックス宛」書状、堺、一六一五年一月二十九日付。

- (92) エルベルト・ワウテルセンより「ジャック・スベックス宛」書状、堺、一六一五年二月二十八日付（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.21, no. 276, fos. 12r）。

- (93) 原文では「[55, 12] 1/2」と表記されている。本稿では帯分数の漢数字表記として整数と真分数の間に「と」を入れて表記している。以下同じ。

- (94) 原文では「sramet (ten)」。
- スタメット織は紡毛織物の一種。Eric Kerridge, *Textile manufactures in early modern England*. Manchester University Press, Manchester; Dover, 1985, p. 110. 「keseys」の項目に、一六一八年にイギリスのコッゲスホルのトーマス・ローレンスが、その地域で五十年以上前に「broad keseys（幅広のカルサイ織）」が製造されていて、オランダ人が現在の「srametes（スタメット織）」と呼ぶものと類似のものであると回想しているとの記述がある。また、「srametu」という種類の織物が十四世紀にフィレンツェで、十六世紀にミラノで製造されていたという。

- (95) 注 84 に同じ。

- (96) 沢尾絵『宗感覺帳』にみる江戸時代前期の染織品の受容と価格——西鶴作品との比較検討を中心に（『日本家政学会誌』六十四（十二）、二〇一三年、七五九～七七八頁）における染織品価格の考察では、越後屋呉服店の

- 三井高好が十七世紀後期に記した『宗感覚帳』の「呉服物相場書上」の記述から、「羅紗の単価が破格であることがわかる」（七七〇頁）と述べられている。
- (97) エルベルト・ワウテルセンより「ジャック・スペックス宛」書状、大坂、一六一五年五月一日付（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.21, no. 276, fos. 14v-15v）。
- (98) 石田千尋『日蘭貿易の史的研究』吉川弘文館、二〇〇四年、一二五頁。
- (99) 現在のベルギー北部のフランドル地方。
- (100) 栗原福也「最盛期におけるライデン毛織物工業の構造変化——Pier de la Court, t Welaren der Stad Leiden の所説を中心として」『東京女子大学論集』九（一）、一九五八年、六十一〜八十七頁。石坂昭雄「オランダ共和国の経済的興隆と十七世紀のヨーロッパ経済——その再検討のために」『北海道大学経済学研究』二十四（四）、一九七四年、一〜六十六頁。
- (101) 前掲『日蘭貿易の史的研究』、一四九頁。
- (102) 新修大阪市史編纂委員会編集『新修大阪市史』第三卷、大阪市、一九八九年、一〇八頁。
- (103) 前掲エルベルト・ワウテルセンより「ジャック・スペックス宛」書状、大坂、一六一五年五月一日付。
- (104) 原文では「[Stroijemondone]」[「Stroijemondono」]と表記されている。「七郎右衛門」か。
- (105) 原文では「[Schescijmondone]」と表記されている。「助左衛門」か。
- (106) 現在の行政区分では兵庫県たつの市に位置し、播磨灘に面する港。
- (107) エルベルト・ワウテルセンより「ジャック・スペックス宛」書状、京都、一六一五年五月十七日付（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.21, no. 276, fos. 17v-18v）。なお、『尼崎市史』第二卷本編二（近世）（尼崎市役所、一九六八年、五十五〜五十六頁）によると、徳川方は大坂冬の陣に続いて夏の陣においても、大坂の経済封鎖を図るために、大坂の川止めを行い、廻船を尼崎へ入港させ、京・伏見への米は尼崎から送るように命じていたことから、この封鎖政策上、尼崎は重要な位置を占めていたという。
- (108) 東京大学史料編纂所『大日本史料』第十二編之十八、東京大学出版会、一九七三年、二二六頁、二九二頁、三〇八頁。
- (109) エルベルト・ワウテルセンおよびマティス・テン・ブルッケより「ジャック・スペックス宛」書状、京都、一六一五年五月二十八日付（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.21, no. 276, fos. 18v-20v）。
- (110) オランダ語原文では「heeren」。「heer」は「領主、君主」の意。本稿では「領主」と訳している。
- (111) エルベルト・ワウテルセンより「ジャック・スペックス宛」書状、京都、一六一五年六月二十九日付（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.21, no. 276, fos. 25v-27v）。
- (112) エルベルト・ワウテルセンより「ジャック・スペックス宛」書状、京都、一六一五年八月十五日付（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.21, no. 276, フオリオ番号なし）。
- (113) エルベルト・ワウテルセンより「ジャック・スペックス宛」書状、京都、一六一五年八月五日付（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.21, no. 276, フオリオ番号なし）。
- (114) エルベルト・ワウテルセンより「ジャック・スペックス宛」書状、京都、一六一五年九月二日付（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.21, no. 276, フオリオ番号なし）。
- (115) エルベルト・ワウテルセンより「ジャック・スペックス宛」書状、京都、一六一六年二月五日付（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.21, no. 276, フオリオ番号なし）。
- (116) エルベルト・ワウテルセンより「ジャック・スペックス宛」書状、大坂、一六一六年二月十七日付（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.21, no. 276, フオリオ番号なし）。

- (117) 原文では「Joffoyedonno」と表記されている。「与兵衛殿」か。
- (118) 原文では「Nisio Mounatsji Jacusinochio」と表記されている。「二条室町薬師町」の辺りは、「室町筋」と称され、当時、呉服などを扱う織物問屋が密集する商業の中心地であった。
- (119) 前掲エルベルト・ワウテルセンおよびマティス・テン・ブルツケより「ジャック・スペックス宛」書状、京都、一六一五年五月二十八日付。
- (120) 原文では「Crobedonnens soon」と表記されている。「Crobe」は「天野屋九郎兵衛」という大坂の商人と推定される。
- (121) 前掲エルベルト・ワウテルセンおよびマティス・テン・ブルツケより「ジャック・スペックス宛」書状、京都、一六一五年五月二十八日付。
- (122) エルベルト・ワウテルセンより「ジャック・スペックス宛」書状、大坂、一六一五年十一月二十五日付（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.21, no. 276, フォリオ番号なし）。
- (123) 前掲エルベルト・ワウテルセンより「ジャック・スペックス宛」書状、京都、一六一六年二月五日付。
- (124) 京間一間は約一・九七メートルであるので、長さ約七・八八メートル、幅約四・九二五メートルの蔵を建造しようとしていたことになる。
- (125) エルベルト・ワウテルセンより「ジャック・スペックス宛」書状、京都、一六一六年四月二日付（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.21, no. 276, フォリオ番号なし）。
- (126) 現在の貨幣価値では約一〇〇万〜一二〇万円に相当する。
- (127) エルベルト・ワウテルセンより「ジャック・スペックス宛」書状、大坂、一六一六年五月十二日付（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.21, no. 276, フォリオ番号なし）。
- (128) 前掲エルベルト・ワウテルセンより「ジャック・スペックス宛」書状、大坂、一六一六年二月十七日付。
- (129) エルベルト・ワウテルセンより「ジャック・スペックス宛」書状、大坂、

- 一六一六年十月十一日付（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.21, no. 276, フォリオ番号なし）。
- (130) オランダ語原文では「omlaech（下に）」と記されている。九州地方を指す。
- (131) 前掲『イギリス商館長日記 原文編』vol. II, p. 38, 3 March 1617 条。
- (132) 原文では「Amnania Crobe」『Amnania Crobe』「Crobyedonne」などと表記されている。「天野屋九郎兵衛」か。前掲メルヒョル・ファン・サントフォールトより「ジャック・スペックス宛」一六一五年一月二十七日付書状によると、「zijn huis was binen de pallsaeten van het casteel（彼の家は〔大坂〕城の防御柵〔総構〕の内にあった）」という。
- (133) 原文では「Comnia Crobedonno」と表記されている。
- (134) 前掲エルベルト・ワウテルセンより「ジャック・スペックス宛」書状、大坂、一六一六年二月十七日付。
- (135) 前掲エルベルト・ワウテルセンより「ジャック・スペックス宛」書状、大坂、一六一六年五月十二日付。
- (136) 片桐一男『阿蘭陀宿海老屋の研究 I 研究篇』思文閣出版、一九九八年。
- (137) 杉森玲子『近世日本の商人と都市社会』東京大学出版会、二〇〇六年、三十二頁、四十五頁。
- (138) 三井高房「町人考見録」中村幸彦『近世町人思想』岩波書店、一九七五年。
- (139) 杉森哲也『呉服所と京都——秋田藩を事例として』『年報都市史研究』七、一九九九年、二十五頁。
- (140) 前掲ヤン・ピーテルスゾーン・クーンより「ジャック・スペックス宛」書状、バンテン、一六一五年六月十日付。
- (141) ヤン・ピーテルスゾーン・クーンより「ジャック・スペックス宛」宛書、バンテン、一六一五年六月十日付（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.21, no. 276, fos. 37v-38r）。
- (142) エルベルト・ワウテルセンより「ジャック・スペックス宛」書状、大坂、一六一五年十一月三日付（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.21, no. 276, フォリオ

- 番号なし)。 大坂、一六一五年十一月二十五日付。
- (143) 前掲エルベルト・ワウテルセンより「ジャック・スペックス宛」書状、大坂、一六一五年十一月二十五日付。
- (144) 前掲エルベルト・ワウテルセンより「ジャック・スペックス宛」書状、大坂、一六一六年二月十七日付。
- (145) 前掲エルベルト・ワウテルセンより「ジャック・スペックス宛」書状、京都、一六一六年四月二日付。
- (146) 前掲エルベルト・ワウテルセンより「ジャック・スペックス宛」書状、大坂、一六一六年九月十一日付。
- (147) エルベルト・ワウテルセンより「ジャック・スペックス宛」書状、大坂、一六一六年十一月十九日付（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.21, no. 276, フォリオ番号なし）。
- (148) 前掲エルベルト・ワウテルセンより「ジャック・スペックス宛」書状、大坂、一六一五年十一月二十五日付。この書状には、スペックスが漆器の注文覚書において、書筆筒の「中央の「観音開きの」戸がアーチ型でかつ、ほかの引き出しが枠付きで、外側にも枠を付けるようにと指示している」ことが記されている。
- (149) 永積洋子「平戸藩とオランダ貿易」『日本歴史』二八六、一九七二年、一頁。
- (150) フレデリック・クレインス「オランダ商館長と將軍謁見——野望、威信、挫折」『徳川社会と日本の近代化』思文閣出版、二〇一五年、五五一〜五七八頁。

表1 エルベルト・ワウテルセン発信ジャック・スベックス宛書状一覧

	書状の発信日付	発信場所	受信場所	備 考
1	1614年9月7日	大坂	平戸	
2	1614年9月7日	大坂	平戸	相場表*
3	1615年1月29日	堺	長崎	長崎にて2月12日に受信
4	1615年2月9日	堺	平戸	
5	1615年2月9日	堺	平戸	クロベエとその息子による売却商品の覚書*
6	1615年2月28日	堺	平戸	2月9日付の書状と共に4月15日に受信
7	1615年3月14日	堺	平戸	4月15日に受信
8	1615年4月22日	大坂	平戸	1615年4月28日に受信
9	1615年5月1日	大坂	平戸	1615年5月15日に受信
10	1615年5月17日	京都	平戸	1616〔1615〕年6月7日に受信
11	1615年5月28日	京都	平戸	マテイス・テン・ブルッケとの連署、1616〔1615〕年6月14日に受信
12	1615年6月28日	京都	平戸	7月7日に受信
13	1615年6月11日	京都	平戸	マテイス・テン・ブルッケとの連署、1616〔1615〕年6月19日に受信
14	1615年6月29日	京都	平戸	
15	1615年7月13日	京都	平戸	
16	1615年7月29日	京都	平戸	
17	1615年7月26日	京都	平戸	
18	1615年8月5日	京都	平戸	
19	1615年8月15日	京都	平戸	
20	1615年8月25日	京都	平戸	
21	1615年9月2日	京都	平戸	
22	1615年9月5日	京都	平戸	
23	1615年9月10日	京都	平戸	
24	1615年11月3日	大坂	平戸	
25	1615年11月25日	大坂	平戸	
26	1615年12月18日	京都	平戸	
27	1615年12月22日	京都	平戸	
28	1616年2月5日	京都	平戸	
29	1616年2月17日	大坂	平戸	
30	1616年2月29日	大坂	平戸	
31	1616年3月7日	京都	平戸	
32	1616年4月2日	京都	平戸	
33	1616年5月12日	大坂	平戸	
34	1616年6月11日	京都	平戸	

大坂の陣前後における平戸オランダ商館員エルベルト・ワウテルセンの商務活動

35	1616 年 7 月 4 日	京都	平戸	
36	1616 年 9 月 8 日	大坂	平戸	
37	1616 年 9 月 11 日	大坂	平戸	
38	1616 年 9 月 30 日	京都	平戸	
39	1616 年 9 月 30 日	京都	平戸	二港制限令について伝える飛脚便*
40	1616 年 10 月 3 日	大坂	平戸	
41	1616 年 10 月 11 日	大坂	平戸	
42	1616 年 10 月 12 日	大坂	平戸	
43	1616 年 10 月 19 日	京都	平戸	
44	1616 年 10 月 13 日	大坂	平戸	
45	1616 年 11 月 2 日	大坂	平戸	
46	1616 年 11 月 19 日	大坂	平戸	
47	1616 年 11 月 14 日	大坂	平戸	
48	1616 年 11 月 27 日	京都	平戸	
49	1616 年 12 月 29 日	大坂	平戸	

※ 1. 「スベックス受信書状綴帳」（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.21, no. 276）からワウテルセン発信書状を抽出し、発信日付、発信場所、受信場所を同綴帳に掲載されている順に掲載。

※ 2. * は同日付別書状のあるもの。

※ 3. 書状の受信日が書状の末尾などに書き入れられている場合には、その日付を備考欄に記した。

※ 4. 発信場所内訳：京都発信 25 通、大坂発信 19 通、堺発信 5 通。

表2 エルベルト・ワウテルセン発信ジャック・スベックス宛 1615 年 11 月 3 日付書状に掲載されている送付物リスト

本状の持参人であるシモン・ビーテルセンを通じて貴殿に次の貨幣、銅製品、鋼鉄、火縄、コロマンデル産および日本産布、ならびに金屏風一双 ^{※1} を送付する。	
貴殿が京都において利子付で借りた 4 万匁のうち、下に送付するのは、完全な形状の丁銀で	1000:0:0 タエル
また、分割された丁銀で	2200:0:0 タエル
また、精錬銀で	154:5:2 タエル
上記のものを 100 匁当たり 7 匁 9 分で交換する手数料	12:2:1 タエル
1 ピコル当たり 150 匁で支払った 3610 斤の銅製品として	541:5:0 タエル
また、貴殿が下に持参した、1 ピコル当たり 37 匁で支払った 200 斤の精錬されていない鋼鉄として	7:4:0 タエル
また、1 ピコル当たり 76 匁 8 分で、392 斤の最上等の精錬鋼鉄として	30:1:0 タエル
また、1 ピコル当たり 44 匁 8 分で、392 斤の少し劣等の精錬鋼鉄として	17:5:6 タエル
また、銅および鋼鉄の購入時に支払った 1 % の手数料として	5:9:6 タエル
また、1 束当たり 3 分で、400 束の火縄として	12:0:0 タエル
また、12 反の「縞」と呼ばれる日本の布として、つまり 1 反は 28 匁で、そして 11 反は各 14½ 匁で	18:7:5 タエル
合 計	4000:0:0 タエル
そして、私の勘定として、下に送付するのは	
完全な形状の丁銀で	170:0:0 タエル
また、精錬銀で	1695:4:8 タエル
上記のものを 100 匁当たり 7 匁 9 分で交換する手数料	133:9:4 タエル
また、鹿皮の販売の際に受け取った貨幣 ^{※2} で、サンカンに帰属するもの	130:0:0 タエル
そして、京都で別れた時に私が貴殿に渡したのは、	
完全な形状の丁銀で	2143:6:9 タエル
精錬銀で	3800:0:0 タエル
その交換の際に支払った手数料の合計、つまり 6000 匁分については 6 %、そして 32,000 匁分については 100 匁当たり 7 匁	260:0:0 タエル
合 計	8333:1:1 タエル

エルベルト・ワウテルセンよりジャック・スベックス宛 1615 年 11 月 3 日付大坂発信書状（ハーグ国立文書館所蔵 1.04.21, no. 276、フォリオ番号なし）から抜粋した送付物リスト部分の和訳。

※1 オランダ語原文では een paer vergulde bejobis と記されている。

※2 オランダ語原文では gelt（geld の古い綴）と記されている。「貨幣、金銭」の意。